

504  
253

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>19</sup> 1 2 3 4 5

始



504  
253

504-253



苦難の人ヨブを中心として

対する態度

大正  
13. 3. 17  
内交

## 序

山と盛りあげられた白骨の前に立ちて、私は言葉も無く、涙ぐむ。焼け潰れた安田邸が、舊主の亡霊を偲ばしめるやうな形をして立つてゐる。

まだ、そここゝに注意して見ると人間の骨片が出てくる。三萬四千人が一度に焼き殺されたと云ふその惨状を思ひ浮べて、私は云ひ現はす可き言葉も無い。

その日に人間の身體に火がついて、消さうとしても消え無かつたと、人は云ふ。倒れたものはみな口から血を吐いて倒れたと云ふ。

三萬四千の生霊が、黒板のチャーク書を拭き消す如くに地上より消え

失せて了つた。

考へてみると痛ましいことである。人間は松火のやうに燃え上り、火焰の旋風に巻き上げられ、火玉となつて、遠くまで飛んで行つた。痛いとか、苦しいとか云ふことはもう過ぎ去つた事實であつた。凡てが超越的の出来事のやうに見える。

私はそれに就てわからぬことが多くある。然し私はかく信じたい。

神は、この苦痛を以つてしても猶、愛である。

苦難は私共に取つては善き賜である。死さへ、神の御心である。神の懷にて凡てが溶解せられてゐる。私は凡ての苦難を持つてしても猶、神を疑ふことが出来ない。私は變轉の凡てを甘受する。

萬能の中には苦難の出現をすら可能とする。私が神となる日、私は喜

びの反對である苦痛をも造るであらう。私が神であれば、生の反對である死を創造するであらう。

萬能の意味は、苦難の創造に對しても制限が無いと云ふことである。全能の意味には生と共に死をも創り得ると云ふことが含まれてゐる。

無から有を、苦難より喜悅を、死より生を創造し得るものは、有より無を、喜悅より苦難を、生より死をも創造し得るものでなければならぬ。神の爲めに制限の墙壁を結び、「何故なればおまへは、悪を作り、苦難を撰び」と問ひ得やうぞ？

全能者に制限は無い。神の爲めには、凡てを許容せねばならぬ。全能者の手に陥るものは苦難と死の賜を甘受せねばならぬ。それが創造の秘義である。悲しむものが幸福であり、饑え餓くものが幸福であり得る生

活はたゞ全能者の手に陥り、創造の秘義より出發して、神の全能なる藝術に參與するもののみそれを味ひ得るのである。

苦難は藝術の終點に立つ。全能者のみこの藝術を味ひ得るのである。苦難はそれのみが終點ではない。生命の藝術に於て、變轉の可能性を信するものが、之を受取り得るのである。

苦難を創造するものは神であることを信じ得るもののみがそれを藝術とし受取る。

十字架の藝術はそこにある。神の藝術は苦難を蒔いて生命を刈り取ることにある。一粒の麥を地に落して萬粒を刈り入るゝことにある。

苦難の籤をひくものは、神の籤をひくものと考える必要がある。苦難のみを思ひつめるものはそれに打勝つことを知らない。然し、神の爲め

創世の秘義を感ぜよ！

に苦難を忍ぶものは、苦痛を藝術化する。

苦痛が美と變るのはその心持ちから出發する。誰しも十字架は悲しいこと、いやなこと、むごつけ無きことである。然し大工イエスに於ては十字架が反つて法悦の輝きであつたと云ふことは、苦難をすら聖化し甘受し得るものは、他に餘す可き聖化が無いからである。

苦難の聖化は、神の最後の藝術である。苦難にすら打掙つものは、他の凡ての喜悦に打掙ち得るにきまつてゐる。

見よ、苦難は最高の藝術では無いか？ 世界苦を除き得るものは、他に残す可き悪が無いではないか？

苦難は相對の世界に立つものには永遠に残る。相對よりよう脱却し得無いものは、苦難に掙つ可き道を知らない。絶對の秘義に這入り得る

もののみ、それに打撻つ可き秘義を知る。絶対なるものは生命の外には無い。

延び上り、打碎き、苦難の中に飛び込んで行く、生命は苦難に怖ぢない。苦痛は生命に取つては、實在の本質では無くして、その附録であり、装飾である。

苦痛が生命の装飾であることに感付くものは、苦痛を怖ぢない。生命に對する幕間は暗黒に見えても、それで苦痛の總量を計算することは出来ない。生命は苦痛よりも強い。被服廠跡にまた青草が萌え出で、バラツクの中に人間が群がる。生命は火焰より強い。

地球が、太陽系の一角に植えられてから幾兆萬年経つか私は知ら無い。火の海を冷えさまさせて、大地を海の中から生え出ださしめ、地震

と、噴火と、暴風と、洪水の激しき變動を越えて、アミバーを人間にまで造り上げた宇宙の内なる神は幾百萬年の變動を貫いて、退化の道をお取りにはならなかつた。

神から云へば、折には悲觀したことも有つたかも知れ無い。その中でも、神は凡ての苦難を貫いて、人間創造にまで成功したのである。或時にはあまりに打續く大爆發と大噴火の爲めに炭酸瓦斯が地殻の表面を蔽ふで、高尚な動物らしいものが創れなかつた時代もあつたらう。大蜥蜴が地上をのそのそと歩き廻り、有肺魚が、その醜い姿で地上を探險に出かけたこともあつたのだ。その後また炭酸瓦斯が凡て水に溶けおとされ大蜥蜴が一度に斃死せねばならぬやうなこともあつた。然しそれでも、神は失望しなかつた。

神は生物進化の道程の手をゆるめ無かつた。失望するなよ、若き魂よ、神は嘗て失望したことが無いではないか？ 苦難は彼に取つては完全な藝術である。

ナザレのイエスは死を彼の藝術の一種と考へた。彼はそれに對して何等臆する處が無かつた。殉教者に對して苦難は光榮の極致である。

そうした場合に、苦痛は苦痛としての本質を全く失つて了つてゐるのである。悦んで受け得る苦痛は苦痛の苦痛では無い。それは光榮の一種類である。

光榮の苦難に參與せよ、神に忠なる若者よ、神に生くるものには、苦難の流血は寶石にも勝る。たとひそれが平凡時の平凡なる苦難であるにしても、苦難は勝利によつて呑み亡ぼさるべきものである。苦味は陶酔

者の口舌にはこの上なき藝術である。

苦き杯を逃げるな、友よ、「み心の儘に」を神に告げよ！ 苦杯を盛られる日に眞實の藝術があり得る。強くあれ、神の如く強きものには、苦痛は北斗星の如く、良心の藝術として好愛せらるる。苦痛によつて愛が密着する。之れを受難の眞理と云ふ。苦難を通過せざる愛は、愛の眞實を持た無い。愛が鍊はれる爲めには苦難の丹鍊が必要である。

神の打ち下ろす苦難の鎚にひるむな、苦難の火花は藝術の最後の至聖所である。此處に入るものは選ばれたる至高の魂である。

受難によつて、仲保者になるが善い。受難の藝術は人を神に造り換へる唯一の道である。苦痛は、神と其の子等のみが負ひ得る光榮である。苦難を甘受るものは、最後の階段に登る。そこにて、神は直接その魂に



す囁く。

一九二三、一二、一四

賀川 豊彦

本所松倉町バラックにて

目次

第一章 苦難に對する態度……………一  
 維摩經とヨブ記——苦の解決は何處にありや——スインバーンの詩——如何にして苦痛に對すべきか

第二章 思想劇としてのヨブ記……………二七  
 ヨブ記研究の意義——劇として構想されしヨブ記——神とサタンとの對話——試練としてのヨブの災害——ヨブ記劇の登場人物——ヨブ本曲の梗概——強きヨブ的精神

第三章 ヨブ記に現れし完全人問題……………五五  
 ヨブの個性——社會人としても完全人——決定説との戦ひ——ヨブ自らの告白——友人の誤解

第四章 ヨブ記に現れし悪の問題……………七五

ヨブ記の書かれし理由——ヨブ記の三大特徴——サタンに對する神の注意——ヨブの災害と厭世觀——ヨブの厭世觀——人間の苦の問題——世界苦の問題——道德惡、社會惡、宗教惡——ヨブの苦悶の演出に就て

第五章 ヨブの友の反對論……………一〇五

定見なきエリハズ——人間に對する不信用——惡を逃避するな——ビルダテの勸善、懲惡說——不完全な人間の歴史——斷案を急ぐな助けよ——教義的なるソバル——一筋に信仰の道に進め

第六章 ヨブに現れたる神……………一三四

一なる神、靈なる神——嚴肅なる神——痲痺せる我等の靈——戦ひの神——赦さるる神——暴虐と絶望の神——先づ世界の暴虐を除かう——絶望の神——内側よりの教會改造

第七章 ヨブの信仰と祈……………一六一

絶對の信仰——仲保者への信仰——ヨブの祈——祈を現實化せよ

第八章 ヨブ記に現れたる詩……………一七三

雄大なる自然の詩——人化せる天地の姿——驚くべき動物の詩

苦難に對する態度

—— 苦難の人ヨブを中心として ——

## 第一章 苦難に對する態度

### 維摩經とヨブ記

苦難に對する態度を記述した宗教書が、東西に一つ宛ある。一つは佛典の維摩經であり、一つは舊約聖書のヨブ記である。而も茲に一奇とすべき事は、此の東西の兩書が、期せずして、共にその構想が劇になつて居る事である。

維摩經は佛教全盛時代に書かれたるもので、多くの佛典中最も秀れた文學である。そしてその全部の構想が劇になつて居る。此の維摩經を讀んで行く裡に例へやうもなく私を喜ばせた二つの事項があつた。その一は信仰といふものが特段な工夫に依つて得られるものでなく、平々凡々の日常生活の中に發見し得らるゝものであると教えてゐる事。その二は維摩經が維摩詰といふ一人の人物を拉し來つて、苦痛に對する態度を決定してゐる事である。

釋尊が、維摩詰の病床に呻吟してゐると聞いて、弟子の一人をその枕邊に見舞はしめやうとしたが、小乗の哲人と賢人等の中、進んでその役を引受けやうとする者がなかつた。之れ蓋し、維摩詰が徹底したる人であつて、くだらぬ人物が見舞に行つても却つて維摩詰の氣を悪くする許りだと思はれたからである。その結果、釋尊門下の賢人として自他共に許した文珠が、代表して維摩詰の病床を訪れる事となつた。

維摩の枕許で、二大賢人の問答が始まる。

文珠「貴公は何故病み給ふか」

維摩「自分自身の爲めに病んでゐるのではない」

文珠「然らば何人の爲めに病み給ふか」

維摩「世界に苦しみのある間、自分はその苦痛を自ら脊負ふて苦しむのだ」

私は眼病の爲めに病床にあつた時、圖らずも此の苦痛に對する解決の文字を

讀んで、維摩の問題が只だに彼一箇の問題でなく、彼の苦痛に對する解決が、又彼一箇の解決に止るものでない事を感じて力強さを覺えた。そして、斯うした苦痛に對する態度と徹底が、今日の凡べての人に對しても尙貴重なる啓示たるを失はない事を痛感したのであつた。

ヨブ記は第二篇以下に於て詳述するが、之も亦維摩經と同様に苦痛に對する解決を與へたもので、その構想も維摩經と同じやうに劇としての表現を採つて居る。即ちヨブといふ一つの完全なる人格が、自己の財産及子女の全部を奪はれ、自らも亦皮膚癩に罹つて、人間としての極度の苦痛の中に生きなければならなかつた。其處へ三人の彼の友人が訪れて来て、或者は神秘論から、或者は經驗論から歸納し、彼の苦痛が彼の不信仰、或は彼の不道德から來たものだとして彼を罵つた。彼之に對しヨブは、神に對する信仰、不信仰が苦を決定するものではない。現に自分は神に對し絶対の信仰を把持してゐるに拘らず、尙且

此の苦難が来ると述べ、又道徳的悪が苦を決定するものでないとして、その證據に自らが潔く、正しき完全人なる事を舉げて居るのである。

悪事をしたから罰が當つたとして、悪と苦とを人間の道徳的起源に歸する事にヨブは反對した。即ち因果の結果として、悪と苦が在るとする議論に對してヨブは反對した。況んや神秘論——苦みは不信仰から來るとの——には頭から反對したのである。

#### 苦の解決は何處にありや

然らば苦の解決は果して何處にあるか。ヨブの煩悶は其處にあつた。肉體の痛みを軽減する爲めに灰の中に踞り乍ら、貝殻を以て自らの醜い皮膚を掻きつゝ、ヨブは獨り此問題を考へた。そしてヨブは今日のあまりに柔和な基督者をして響感せしむるやうな、亂暴な言葉をさへ神に投げ付けた。

ヨブの煩悶は實に人間として地上に生れ出て來た悲しみのみでなく、年老

いて身の衰へ行く悲哀をかこつのみでもなく、又死そのものを嘆くのみでなく、廣く社會悪、宇宙悪を考察して、「何故なれば神は富める者を恵み、陋巷に飢と寒さに呻吟する者を顧み給はざるや」と、大いなる社會苦、宇宙苦に對する煩悶を訴へて居るのである。即ち「悪き人何とて生き永らへ、老且つ力強くなるや」と反問し、又「神、彼の咎を積蓄へてその子孫に報い給ふか、之を彼自らの身に報い知らしむるに如かずや」と、神の惡に對する態度の煮切らぬのをさへ難詰してゐるのだ。

ヨブは實に自然的苦の煩悶を持つのみならず、人間苦、社會苦に對する煩悶を持つて神を難詰してゐるのであつて、之は最も近代的の煩悶である。

維摩經には斯うした社會苦に對する煩悶は發見する事が出來ない。

昔時の苦に對する態度は、謂はゞ宿命に對する盲滅法の藻掻きに過ぎなかつた。即ち或る決定的の綱があつて、人間はその綱の中に包まれて足一歩もその

外に出る事が出来ないものとしたのである。

希臘の各種の悲劇の筋書を見ても、凡てが運命に對する抗爭である。否、只だに希臘の昔とのみ言はず、今日でも素人考へをする人は、自己の苦しみを以て因果だとする。自己の家に盲啞不具者の出た場合でも、凡て宿世の因果だとし、地理的、遺傳的乃至は天文の變化、傳染病の流行までが、皆見えない運命の不思議の手が、まるで猛鷲の爪のやうに我等の上にしつかとか、つて、身動きのならぬやうにする——之が宿命だとする向が多いのである。

此の態度は所謂「あきらめ」である。自己を放擲して、法則の赴く儘に身を委ねる態度である。

併し人間が漸次成長すると共に、我等は最早そうした宿命、そうした外部的宿命に應じなくなつた。ロマン、ローランは言つて居る。

「宿命は人間が決定せぬ他の凡ての部分と言ふのであつて、人間の決定し得

る部分は宿命ではない」と。

人間の精神的生活が豊かとなり、その内側に新しき力を得るに至るや、外部的宿命に應じなくなるのは當然の事である。之を例へば自分の中にギイアがあつて、水を九十度の角度に流す事の出来る力がありとせば、苦痛の決定はその角度まで、我等自身の中に於て決定する事が出来て、宿命に囚れる事なしに済むのである。

斯うした人間の成長に依つて、悪及び苦に對する態度は自ら變化せざるを得ない。此の成長に伴ふ態度の變化は戯曲の上にも明かに現はれて居る。

希臘古代の悲劇は、主として人間外の神が、人間に苦痛を強いて起つた悲劇であるが、夫れがシェークスピアになると、その悲劇は神の強ひた苦痛ではなく、人間の生理的、社會的困難の中に發見せらるゝものとなつて居る。其處に人間の成長に依る苦痛に對する態度の變遷と推移がある。

沙翁の傑作「ハムレット」にしても、古代の宿命に對する抗争を描いたものではない。主人公ハムレットの苦痛は疑惑から出發して居る。即ちハムレットの母が夫君の弟と通じ、遂に夫君を殺害した。それを父の亡靈の告げに依つて聞知つたハムレットは大に煩悶し、果ては大なる懷疑の念に囚はれ、戀人オフエリヤや友人の愛をすら疑つて煩悶に煩悶を重ねる。——夫れは人間の苦みである。希臘悲劇の宿命苦とは明かに區別せられなければならない。

ハムレット以外の沙翁の悲劇に現はれた苦痛を見ても、或時は時間の相違、或時は地理的關係から發生する人間の行違ひが人間の苦みとなつて居る。併し沙翁の描いた苦しみは社會的、生理的、若くは各種戀愛關係から生じた苦しみに止つて、今日、現代人が持つ苦しみ、即ち個性そのもの、植付られた「性格の苦」にまで未だ來てゐない。

今日の我等の苦しみは、ハムレット以上に更に悲痛である。

### スインバーンの詩

英國の詩人スインバーンは Hymn of man (人間の讃歌) といふ詩の中に惡を唄ひ、人間がその苦に對して無氣力に依られてゐるのは神の責任だとして、神を呪ふてゐる。

沙翁の描いた苦しみに對しては逃げ口があつた。それは神へ行く事だつた。又その苦しみは未だ表面的であつた。ヨブなどの記した如く、宇宙全體が眞から腐つてゐると考へたのではなかつた。然るにスインバーンの詩は十九世紀末に文明が將に腐らんとするを見て、悲しみの餘りに絶叫した悲痛な歌であつた

(The supreme Evil, God)

Thou hast kissed us, and hast smitten; Thou hast laid.

Upon us with thy left hand life and said life; and again

Thou hast said Yield up your breath, And with thy right hand laid



upon us death. —————

Because thou art over all who are over us;

Because thy name is live, and our name death. Because thou art Oniel,  
and men are piteous and our hands labour and thine hand scattereth.

Lo, eith hearts rent and knees made tremulous, Lo with ephemeral lips  
and casual breath. A least we witness of thee ere we die

That these things are not otherwise but thines, That each man in his  
heart sigheth and saith, That all men even as "I" All we are against thee,  
against thee O God high, But ye, Keep ye on earth

Your lips from over speech Loud works and longings are so little worth;  
And the end is had to reach —————

汝は花園の中に人を作つた。その花園は人を墮落せしめ、誘惑せしめた。  
汝は人間に毒を盛り、血と燔祭とを以て救を乞はねばならぬ仕組とした。  
そして汝は救と稱する奇妙なるものを作つて、汝が選べる特權者にのみ、之  
を與へるやうに仕組んだ。

汝は何といふ暗き天であらう。何といふ怖しき兇刃を持つものだらう。

汝は人間の狂氣の殿堂を作り、彼を恥かしめた。そして汝の名に依つて輝く  
灯の禮拜所を作つてゐる。

汝は無意味な世界を、影の如く又貝殻の如き幻を天と命名して民に示す。

斯ういつた呪の聲を擧ぐるのみならず、彼は「又最高の惡——神」と題する  
詩を作つて神を呼ぶに極惡なる者、最殘酷なるものとした。

Thou madest man in the garden; thou temptest man and he fell:

Thou gavest him poison for pardon for blood and burnt offering to sell,

Thou hast sealed thine elect to salvation, fast locked with faith for the key-  
Make now thyself expiation, and be thine atonement for thee.

Ah, thou that darkenest heaven-ah, thou that bringest a sword,

By the crimes of thine hands unforgiven they be seach then to hear them

O Lord \_\_\_\_\_

O thou last built thee a shrine of the Madness of man and his shame,  
and last hung in the midst for a sign of his worship the lamp of thy  
name,

Thou hast shown him heaven in a vision a void world's shadow and shell,  
And has fed thy delight and devious with firm of belief as of Hell.

汝の名は生命、我等の名は死、

汝の名は残酷、人間の名は悪、

我等は勞し、汝は夫れを撒く。

スインバーンはこうして苦痛に對する悲痛な聲を擧げて居るが、彼の神を呪ふ態度は、近代人の心持を代表してゐるものとも思はれる。人間の苦痛、死、闘争、疾病、不具者の存在に對して、神が餘りに無頓着だとする態度は、確かに近代人の苦痛に對する態度を代辨するものである。

之は宿命に對するあきらめではない。二元論的の見方でもない。又沙翁の如く、苦痛を表面的解決に止めるものでもない。それは實在の根柢に突き入つた一つの疑惑的思想である。

#### 如何にして苦痛に對すべきか

然らば我等は如何に苦痛に對する態度を採るべきか。それは宿命だから仕方

がないとあきらめて了ふべきでもなく、又ヨブの友人の言ふ如く、過去の罪障の罰だと決定して了ふべきでもなく、さりとて最も悲しい嘆きをあげてゐる許りであつてもならぬとせば、我等は如何なる態度を苦痛の前に採るべきか。我等は先づ宗教が、此の苦しみに對して如何なる解決を與へるかといふ事を考へねばならない。

如何なる宗教にも一つの効用がある。それは宗教の本質が苦に對する工夫であるといふ一事である。無論之れは種々の意味の含まれてゐる事だが、概括的に考察して、今日までの自然宗教にしても、人類宗教にしても、心理宗教乃至は良心宗教にしても、苟も宗教といふ宗教が凡べて持つ處の通有性は、苦痛に對する工夫である事である。此工夫を考へない宗教は一つもない。

それは宿命だ。重い運命が天災を與へ、苦を人間に與ふるものだとする宗教も、此の宿命の責め苦から免れる爲めに、神に呪ひをなし、若くはなだめの献

げ物をした。宗教の本質が誤つてゐたとしても、之れが苦痛を免れんとする工夫である事は、十分に認める事が出来る。古き自然宗教、人類宗教にして然り況んや心理宗教において之れが顯著である。

各種の神癒宗教を見給へ。病める教徒が參籠すると、教會の人々はその病苦を掃ふ爲めに、種々な覺束ない人間の努力をするではないか。之れも亦惡に對する救ひの工夫の一つなのだ。

心理宗教になると佛教などでは涅槃の中には此の表面的な世界を亡ぼして了ふとする。大乘佛教では涅槃の事を「迷妄を脱却し、功德を圓成し、不生不滅なる法身の眞證に歸する」と説明し、小乗では「三界の煩惱を斷滅して灰身無爲に歸する」とするが、迷妄を脱却するといつても、煩惱を斷滅するといつても要するに苦を救ふ工夫の意味に外ならない。

之が更に良心宗教になるとキリスト教の如き道德的惡をも贖はんと努力する

のである。

生理宗教、心理宗教及び良心宗教の間に道德的、心理的の價値の區別はあるにしても、凡べての宗教が悪に打勝つ工夫である點に於ては一である。或者は生理的に六根を清淨する工夫だといひ、或者は心理的に天災に對する魔除の工夫だといふが、要するに惡に打克つ力を與ふる事に努力してゐる事は一である。

然らば此の惡に打克つ工夫は果して惡そのもの、本質を解決し得たであらうか。

宗教は人間惡及人間苦に對する哲學的解釋を與へはしない。何故苦痛が發生したかについても亦宗教は何等教ふる處がない。今日までの宗教が然うであつたのみならず、恐らくは永久にそうであらう。

或人は之を人間の不完全といふ事に起因せしめる。即ち人間が不完全なるが

故に惡の起源なり、惡の本質がわからぬのだといふ。又或人は人間の不完全を言はずに、神の不完全に起因せしめる。即ち凡べての人間惡、社會惡を神の作つたものとするのである。スインパーンの如きその一人で、惡を作つた神こそ眞に呪ふべきものだとするのである。此論者をして言はしむれば、人間は惡に對する責任を持たない。神のみが責任を持つといふのである。貪婪飽くなき資本家も責任がない。只だ神のみが責任を持つといふのだ。

併し此の不完全説は遂に永久の謎である。哲學的にも秘密は永久に解けない。

#### 苦痛に對するイエスの言葉

此の謎に對してイエスは勇敢に説明を試みて居る。ヨハネ傳第九章の盲人に關する問答が夫れである。

「性來の盲人のあるのは神か悪いのか人が悪いのか」との問に對しイエスは斯

う答へてゐる。

『此人の罪に非ず、又その双親の罪にも非ず、彼に由つて神のわざの顯れん爲めなり、晝の間は我必ず我を遺しし者の行をなすべし、夜來らん其時誰も行をなす事能はず、我世に在る時は世の光なり。』

斯く答へて、イエスは唾にて土を溶き、その泥を盲人の目に塗つて、シロアムの池の水にて洗はしめた。盲人の目は開いた。

イエスの惡に對する言葉は極めて少ない。併し右に掲げた一つの事實の中に十分にイエスの惡觀が現はれてゐるのを見なければならぬ。

イエスは惡を哲學的に解釋しなかつた。如何にしてか宇宙に發生したかといふ事についても毫も述べてゐない。況んやニーチエのやうに價值の判斷もしてゐない。

イエスは『苦は在る、併し夫れは人間の責任でない。神こそ十分之に責任を

持ち得るものだ」と言つたのである。そして神がその苦に對する責任を負ふてくれられるといふのである。スインバーン等と異なる處は、スインバーンは神がその責任を回避するものとして神を呪へるに反し、イエスは神がその責任の重荷を進んで背負ふてくれられるとして神を讚美せる點である。

然るに世間の人は兎もすれば凡へての天災否、時には腹痛すらをも天の罰だとする。ヨブが全財産を失ひ、自らも瀕死の状態にある時、彼の友は彼のその苦痛を天罰だとし、彼の不道德と不徹底を責めた。ヨブは之に反對して、苦も惡も自分の責任でないと直言した。

不信仰、不徹底が凡ての苦の原因だとするのは大なる誤解である。時にはそゝうした事も一因であらうが、凡ての場合が然うだとは決して言へない。

今日或詩人は、神が我等を不信仰、不道德に置くのが悪いとして、神を惡だと言ふ。併し此場合一考せねばならぬ事は、イエスの所謂神が責任を持ち給ふ

といふ事である。

神はその人間惡、社會惡の責任を背負へぬほど羸弱ではない。全部の人間の責任を荷負つて立ち給ふ大能の神である。イエスが「彼に依つて神の作爲の顯れんためなり」と言つたのは此意味である。

此の心持を知るならば、我等は何とて煩悶する必要があらう。

之を自然科学又は哲學に訊いても、宇宙の仕組を知る事は至難である。嘗だ判明する處は、人間の及ばぬ力、人間以上の神が世界を作り給へる事だけである。我等は全體を解しないが、只だ神に何かの仕組のある事だけを信ずる事が出来るのである。

無神論者は神を罵り、寧ろ人間の方が神に増して恵み多しとして呪の聲を擧げたが、結局惡に對する根源に關する彼の智識の淺薄を暴露するに過ぎぬのであつた。

スインバーンは人間のみが勞作してゐるといふけれども、その人間の勞作は何の力に依るか、神を離れて我等の實在なく、況んや我等の勞作はないではないか。

我等は神の創作の一部分であると考へる時、スインバーンの矛盾は明瞭となる。

餘りに神と人とを區別し過ぎてはならない。神が圓周の外にあるものと考へるのは、詩人の歌ならば兎も角、苟くも苦難に對する態度を検する者の取るべきところではない。

スインバーンの言ふ如く、神は惡にして人間のみが善いとしたら、その善い人間の發生する源には、更に善い根がある筈ではないか。

我等は不完全である。それでゐて、凡ての苦を決定しやうとするのは鳴訝がましい事ではないか。

### 生命は苦痛より大なり

ヨブが神を疑ふた時、神がヨブに質問した。美しき質問である。ヨブ記第四十一章に記された鱈などの物語が夫れである。

少しの事に思ひつめて苦に引つかゝつてゐる時、仰いで大宇宙を見よ、そこには大きな宇宙悪がある。逆ても解決の出来ないやうな大きな悪がある。

我等の認識は狭い。殆んど無能力に近い。只だ知る「生命は苦痛より大なる事」を。

然うだ。苦痛は生命の一部分である。

苦痛の半面には喜悅、歡喜にまで伸び上がる力がある。生命に對する態度を徹底する時、苦痛をも乗越え得る力のある事を知る。即ち生命なる神は、惡をも、善をも、喜びをも、悲しみをも作つた。

神は苦に對する哲學的解釋を與へないが、神に依り苦をも乗越え得る事を知

らしめた。之れが信仰である。

維摩經に依れば、維摩は佛陀に愛せられたものとして、宇宙に苦痛があれば自分もその一部分を荷負ふと言つた。それは眞に尊き心である。併し私は維摩の苦痛に對する態度は、未だ自分の信仰を言ひ現はしてゐないと思ふ。

私の苦に對する態度は、哲學的に苦痛を考へる事ではなくて、私を生み、又天地萬有を作り給ふ神が、苦痛よりも大なる力を有し給ふといふを信する事である。破壊しても破壊しても尙建設の根城を持つ大きな創造主——否、苦痛の中に大きな建設をする神、それは生命である。夫れを信するのだ。

怖しき生命の神、爆發する神、その前には苦痛も、惡も吹き飛ばされて了ふ神の火柱の立つ時、苦をも押しつけて了ふのだ。

苦痛に對する哲學的見解は知らない。併し生命を知る事に依り、苦痛をも押し退けて立ち得る事を信するのである。

オイツケンの「宗教の眞諦」には「哲學は苦痛及惡を解決する鍵とはならぬ  
只だ信する事に依つてのみ勝ち得る」と記されてゐる。

神を信する事は苦をすら乗越え、之を道具とし、刺戟薬として、生命を仰上  
らせる勇氣のある事を學ぶ事である。

私は苦痛を回避しまゐ。

小乗佛敎は苦を逃避せん爲めに「無」を要求し、絶滅を工夫した。併し大乘佛  
敎はその誤りを發見し、寧ろ苦の中に飛込み、之を乗切らねばならぬ事を教え  
た。

夫れは寧ろ力の問題である。生命の問題である。

苦に對する哲學の悟りなど、何するものぞ。

苦を乗切る「力」の問題だ。

ギタンヂヤリにタゴールの唄へる詩を見ても、彼は苦を逃げない。苦は喜び

の半面だとした。苦しみの中に、無限の喜びの生れる事の可能性を信じた。

併し此の靜かな印度の詩人の考へよりも我等はイエスの心地を採る。「凡べて  
が神の榮え」だとせる態度——その爲めに我等は神に依つて悦んで苦を受ける  
といふのだ。

然う言つたイエスは自ら喜んで十字架についた。

パロも苦痛を神よりの賜物として喜んで受けた。(ピリビ書第一章二十九節

参照)

然うだ。苦痛は生命の劇曲の一割當である。一役である。

強い生命にあふる時、苦痛も来い。北風も来い。凡べての暴風に遭つても、  
その逆風を乗切る力を持つといふ神との信頼こそ、強き近代人の信仰でなけれ  
ばならぬ。

苦痛を逃避するな、山の中にも逃げ込むな。平凡な生活の中に、喜んで凡て



の苦難を嘗めやう。

苦痛は神の榮の一部分だ。苦痛を—十字架を荷負ふて神の榮えとするのだ。

—期う思ふ時、苦痛を否定する氣にはならない。そして悲しみも苦しみも最早呪の理由とならない。

ヨブは苦痛に餘つて却つて大きな神の攝理を知つたといふ。我等も亦生命の戯曲を味ふて、大きな神の攝理を知る事を寧ろ感謝しなければならぬ。

何でも來い。怖いものはない。凡べてを生命の神に委ね、無になつても尙神を讚美しやうではないか。

## 第二章 思想劇としてのヨブ記

### ヨブ記研究の意義

舊約聖書三十九篇の中で、個人的の信仰経験を劇的に書いたものは、決して數多くはない。その數多からぬ中でも、ヨブを主人公として描き出されたヨブ記ほど、我等に著しく信仰の或る方面を教えるものはない。「信仰」といふ事それ自身を、ヨブ記ほど深刻に考察したものは、舊約聖書全巻を通じて他の何れの部分にも發見する事が出来ない。

元來、舊約聖書は民族の歴史であつて、一つの靈について書き記したといふものは頗る稀である。夫れは常に民族中心を以て書かれて居る。恰も我國の神道が、日本國民を中心とし、個人はその附録の如くに取扱つたと同様に、ユダヤでも、一つの靈を信仰の對象とはせず、民族全體を對照とした。そして神に

依つて救はるゝものも、個人ではなくイスラエル民族であつた。

併し之を以て今は用もなき昔時の物語と看過し去つてはならぬ。今日でも此の見方をして居るものが少くない。彼の社會主義者の如き、經濟社會をのみ尊重して、靈の中に示現する神の國建設に考へ及ばぬのは、此の一例ではあるまいか。

何は兎もあれ、民族主義の横溢する舊約聖書の中に、一人の人間を中心として、その人物に特別の問題を考へしめ、信仰を味せたヨブ記のある事は、閑却してならぬ大きな事實である。

ヨブ記について、尙一つ看過すべからざる重要な點は、ヨブといふ人物が、神の前に曳き出されて、總ゆる苦痛と困難の中に試練を受けた人物である、と云ふ事である。

神を信ずる事に依つて必ずしも幸福は來ない。神は時に幸福の代りに苦痛を

與へ給ふ事もあるとの問題を提示した點である。

然らば全能なる神、善なる神が、何故なれば惡を作り給ひしか。此問題に深刻に突喊して行つて居るのがヨブ記の骨子である。

斯る内側の苦悶は、餘ほど成熟した靈でなければ考へつかぬ處である。成熟しない靈には、永久に來ない苦悶である。換言すれば、靈の奥底に深き自覺と反省とを以て苦惱が叢雲の如く湧く事は、成熟した靈にして始めてあり得る事である。

疑惑は、青年に依つて始めて現れるものである。希臘時代を見ても、紀元前五百年頃には疑惑があつた。即ちソフィストの時代が之である。此の疑惑時代を切開いてソクラテスが來た。印度でも永い疑惑時代があつて、その中から釋迦が生れた。

疑惑は成長の兆である。

自然の美に見惚れて、恍惚として居る時には、靈に疑惑は來ない。併し靈を自ら觀照し、反省し、研讀する時、其處に疑惑が來る。

ヨブ記ほど、神に多くの質疑を發して居るものは稀れである。而もヨブ記はその疑惑を通じ、神に對して絶對の信仰を記述して居る。之はヨブ記の著者が餘程成長した靈の持主であつたかを窺知し得べき證據である。

日本の現状を見るに、憂ふべき事實が頗る多い。日本は今過度期にある。煩悶時代である。此の疑惑時代を通じ、日本は神を見なければならぬ。ヨブ記の研究は此の意味に於て必要である。

#### 劇として構想されしヨブ記

ヨブ記の構想は一の劇である。而も之は舞臺の上に演ずるものではなく、朗讀劇とも稱すべきものである。プラトーも、之れと同じ手法を以て有名なる哲學を劇の中に仕組んだ。對話篇が夫れである。

劇を通じて信仰を表現する事の利害は相半する。先づ弊害の部分から説明すると左の如くである。

一、問題を輕卒に取扱ふと考へらるゝ事。即ち事實に遠ざかり、假想的氣分を濃厚にするとの批難であつて、今日の教會が觀劇を排斥する傾向のあるのも此點に起因して居る。

二、劇が我等の實生活に沒交渉であると考へらるゝ事。即ち劇を以て一の遊戯と見るものである。眞摯に勞働する者は、ソナナ悠長なものを見る氣分にはなれないとするのであつて、此種論者はヨブ記を以て現實の事實、神の默示と見やうとするのである。

三、劇それ自身の性質として、神を冒瀆すると考へる事。ヨブ記が全能の神を芝居の一役割に振つてある事を怪しからぬとするのである。斯くの如く、一部の人は信仰を表現する爲めに劇を利用する事を忌み嫌ふ

が、之には大いなる誤解がある。

劇は成熟した霊のみが取り得る強い創作である。劇は表面的だといつて批難する人があるが、表面的であるといふ事は、畢竟表現的であるといふ事である。霊が成熟する時、表現を取らうとする。行詰つた時には創作はない。

世界に於ける劇の發達の歴史を見ても、文化の絶頂にある時にのみ劇がある。自己反省の明かにする時に劇がある。霊が行詰つて、餘裕のない時に劇は書けない。それがモウ一段強く進む時、自分の姿を自分の前に明かに表現する事が出来るやうになる。ニーチェは之を『悲劇の出生』と云つた。

悲劇の出生する前までは、滑稽な神樂、能やうな、自己の生活に何等批判を加へないものが演せられて居た。それが悲哀にも批判を加へ得るやうになり、之を劇として表現する事の出来るやうになつたのは、全く自己に強い力が湧いたからである。霊が成熟したからである。

此の意味に於てヨブ記を一つの劇と見るのは、決して前論者の言ふやうな恥辱ではない。寧ろ霊が成熟した證據として、誇るべきものである。従つて劇を以て一の遊戯と見て、之に反對する論者などに對しては『滅相もない』と答へたい。遊戯どころか、それは嚴肅な自覺であり、反省であり、伸びんとする力である。

「劇が神を冒瀆する」といふ反對論に至つては、最早辯駁の必要もあるまい。無限を我等の有限の靈に取入るゝ場合に、無限の神の一つの部面を、約束の言葉で表したに過ぎないのだ。劇に神を取入るゝ事は、決して冒瀆でも、恥辱でもない。

舊約聖書の中に於て、劇らしき劇は、ヨブ記一卷であるが、今日之を見るもゲーテのファウスト、ミルトンの失樂園、その他イブセン、シエークスピアの傑作に比して優るとも劣るものではない。それは最も成熟せる靈の作品であら

ねばならぬ。

或人は之が二千五百年前に作られたものだと理由に依り、今日讀む價值がないとするが、二千五百年の干潮が来て、靈が涸れて居たとしたら、我等は二千五百年前の創作を輕蔑する事は出来ない。

希臘の悲劇にアスキラスの劇がある。ヨブ記は夫れに比しても遙かに秀れて居る。

ヨブ記は思想劇であるが、その書き方は散文ではなく詩である。全部が散文詩である。故に之は讀むよりも歌ふが善い。秀れたる朗讀劇である。

ヨブ記は沙翁の戯曲よりも偉大である。沙翁が劇中に言はしめて居る格言の如きものは、ヨブ記には無數にある。沙翁に心酔する人よ、試にヨブを繕いて見給へ。其處には恐らく「ヨブにコンナ言葉があるとは」と、一驚を喫するものが多からう。

世人はヨブ記を以て人間の煩悶を記したものとのみ考へて居る。齊藤野の人がヨブ記論を書いた事がある。併しヨブ記を深く讀んでゐなかつた爲めに、大きな欄へ處を逸して居る。私は之を戯曲と見るのみならず尙現代的に考へたい。

#### 神とサタンとの對話

ヨブ記は之を(一)序曲、(二)本曲、(三)終曲の三つとする。

序曲第一場の舞臺面は天上である。幕が開くと、其處に 神と、神の子と、サタンが居てヨブについて物語つて居る。

神「サタン、お前は何處から來たのか」

惡「ハイ、地上のあちらこちらを行きめぐつて參りました。」

神「そうか、ではわが僕ヨブをも見たらうな。彼れのやうに完全にして正しい、そして神を畏れ惡に遠ざかる信仰厚き人間は又とないと思ふよ。」

惡「併し、夫れはあなたが惠みを彼にお殘しになるからで、若し反對に、あな

たが彼の一切の所有物をお取上げになるなら、彼は屹度信仰を失つてあなたを  
咀ふでございませう。」

眞そうか。では彼の一切の持物をお前の手に任す事にする。果して彼が信仰  
を失ふかどうか、試みて見るが善い。併し唯だ彼の身に、おまへの手をつけて  
はならぬ。」

「ハイ。」

(悪魔退場)

此處で舞臺は暗轉し、地上の場景と變る。言ふまでもない。ヨブに對して五  
つの災厄が降つて來る場面である。

第一の使者 申上げます。只今牛が田を耕しその傍らで驢馬が草を喰べてのまし  
た處へ、シバ人が襲ふて参りまして、その牛馬を奪ひ、剩へ若者を殺害致しま  
した。私一人逃れて御前にお知らせに参りました。」

(第一使者退場、行違ひに第二の使者慌しく登場)

第二の使者 申上げます。只今神の火が天から降つて参りまして、羊及び若者を  
焚き滅して了ひました。私一人逃れて御前にお知らせに参りました。」

(言ひ終らぬ裡、第三の使者登場)

第三の使者 申上げます。只今カルデヤ人が三隊に分れて参りまして略駝を襲ひ  
之を奪ひ、尙及を以て若者を打殺しました。私一人逃れて御注進に参りまし  
た。」

(言ひ終らぬ裡、第四の使者登場)

第四の使者 申上げます。御主人のお兒達が第一番目のお兄様の家で御食事をな  
さつてゐる處へ、突如荒野の方から大風が吹いて参りまして、家の四隅を撃つ  
たかと思ふ間に、忽ち家根が落ちてお兒達は凡てその下敷となつておなくなり  
になりました。私はそれを御知らせ申す爲めに唯だ一人逃れて参りました。」

(此時ヨブ起あがり外衣を裂き髪を斬り地に伏して拜して言ふ)

ヨブ「私は裸で母の胎から出ました。だから又裸で彼處に歸りませう。エホバ與へ、エホバ取りたまふのです。エホバの御名は讃むべきかな。」

ヨブは遂に神を咀はなかつたのみならず、却つてエホバの名を讃めたゝえたサタンはあてが外れた譯である。

舞臺は再び暗轉し、天上の場景となる。

(神の子等來つてエホバの前に立つ、サタンも亦來つてその中にある)

神「サタンよ、お前は何處から來たか。」

惡「地を行きめぐり此處彼處と歩いて參りました。」

神「では、お前はわが僕ヨブを見たらうな。彼の如く信仰の厚い者はない。お前は私に勤めて理由もないのに彼を苦ませたが、彼は己れを完うし、自ら堅くして信仰を失はなかつたではないか。」

惡「イ、エ、それはあなたが彼の身體に障つてはならぬと仰つた爲めで、若しもあなたが手をのべて、彼の骨と肉を撃ち給ふたなら、如何な彼でも、屹度信仰を失ふて神を咀ふてございませう。」

神「では、彼をお前の手に委すとしやう。更に試みて見るが善い。併し彼の生命を害ふ事だけはならぬぞよ。」

(サタン勇躍して退場)

舞臺は三度暗轉して再び地上の場景となる。其處にはヨブが第五の災厄即ち激しい病ひ(癩病)を得、足の跖から頭の顛邊まで一面に腫物の爲めに皮がむけて、するくになつてゐるのを、土瓦の碎片を以て自ら掻き乍ら、灰の中に坐つて居る。妻とヨブとの對話が始まる。

妻「斯うして次ぎから次ぎへと災厄が來るのは神のない證據です。それなのにあなたは未だ神を信じなさるのですか。莫迦々々しい事だ。いつその事、神を

唯つて死んで了ふ方が、いくらでしたが知れやしない。」

「之を黙り。それだからお前は馬鹿だといふのだ。私達は神様から福祉を受け居る。で災禍を受けない譯には行かぬではないか。」  
之で序曲は畢る。

最後の「ヨブの言葉」我等神より福祉を受るなれば、災禍をも亦受けざるを得ない。何といふ強い信仰だらう。

それにしても何といふ又大膽な序曲であらう。「ファウスト」にも見られぬ、希臘悲劇の中にも發見する事の出來ぬ大膽さだ。尤も、希臘悲劇の中には、神と人との交渉を描いたものもあるにはあるが、全智全能の神と悪魔とを拉し來つて、演技をなさしむるといふが如き大膽な劇はない。

對話劇「ヨブ記」は先づ人の意表外に出た此の天上と地上の對話を以て、その序幕として居るのである。私共は先づ此の序幕即ち「ヨブの試練」について、少

しく考へなければならぬ。

#### 試練としてのヨブの災害

所謂「災害」とは抑も如何なる意味のものであらうか。

或時一人の盲が歩いて居るのを見て、弟子がイエスに斯麼問を發した。

「先生、此人が盲目に生れたのは誰の罪でせうか。自分の罪でせうかそれとも両親の罪でせうか。」

之に對するイエスの答は簡單明瞭だつた。

「此人の罪でもない。又双親の罪でもない。彼に由つて神の作爲の顯れんためだ。」

神が善であるなら、何故生來の不具者を作り給ふたか、何故災害を起し給ふか——之れが弟子達の臍に落ちない點であつた。夫れに對するイエスの答へは「夫れは神の御榮えの爲めだ」といふにあつた。神は福祉を人に與へ給ふと共に



災厄をも與へ給ふ。凡べてが神の御榮だとの意味である。

併し斯うしたイエスの如き徹底した信仰に達する爲めには、ユダヤ人は餘ほど永く煩悶した。ユダヤ人は最初から此の信仰に達してゐた譯では勿論ない。國民的試練——天變、地異、國民的滅亡——を具さに經驗して煩悶した揚句に漸くに到達し得た信仰であつた。

ユダヤ地方には、屢々地震が搖つた。舊約聖書を見ても、又黙示録を見ても隨所に地震の記述がある。併し斯うした地上の厄災よりも、ユダヤ人に取つての悩みは、國民全體が奴隸として他國に賣られて行く事にあつた。自負心の強いアブラハムの子孫が、全國民を擧げて他國の奴隸となり、文字通り鼻に穴を穿たれ、牛の如く曳かるゝに至つては、感慨なきを得なかつた事であらう。

此の國民的災害、此の大なる悲運が、遂にユダヤ人をして、凡べての災厄も亦神の御榮えの爲めだとの信仰に達せしめたのである。

ヨブの信仰は此の信仰であつた。

「我等神より福祉を受るなれば、災禍をも亦受けざらんや」とのヨブの信仰はつまり、イエスの「神の作爲の顯れん爲めなり」の信仰と、その軋を一つにする譯である。而もヨブが此信仰に達するためには、ユダヤ人が多くの試練を受けたと同じやうに、彼も亦五つの大きな災厄を経験したのであつた。

第一幕に於けるヨブの災厄の始め二つは人工的の悩みで、他の二つは自然的の悩みであつた。人工、自然が交互に來て居る事に注意しなければならぬ。

ヨブ記は、元來、ユダヤ人が國民全體として受けた悩みを、ヨブといふ一人の人物を借り、之が思想的背景として記したものと考へられる即ち、ヨブの苦惱は畢竟ユダヤ國民の苦惱そのものである。ヨブに對し、人爲的不幸と自然的不幸が交互に來たのは、ユダヤ民族の悩みが、自然的悩みたると同時に人爲的悩みであつた事を物語るものである。

天から火が降り、大風が吹いて、人畜を倒したといふ自然的災厄も素より甚しいに相違ない。併し之に他國民の侵入といふ人為的の災厄が加はる事に依つて、苦しみと悲しみは、更にいや増すのであつた。

シバ人にしても、カルデヤ人にしても、共にエダヤ國民のものである。その敵が急に襲撃して來た。牛が耕す傍らに、驢馬が草を喰ふてると言つたやうな長閑な野の平和が、忽ち破れて、若者達が殺される。と思ふと、又忽ち天火が降り來つて羊を殺し、掠奪隊が來て駱駝を奪ひ、剩へ若者が異國人の刃に倒れる。夫れで終りかと思つると忽ち颶風が來て、一家全滅の大慘事を惹起した。下世話に言ふ「躓くと折重さなる」といふ事が、現實に起つた譯である。

ヨブは五つの災厄を相踵いで受けた。此の悲しみに會つたヨブは夫れでも挫折しなかつた。併し煩悶した。大に煩悶した。その煩悶こそ、ヨブ記の骨子でなければならぬ。

#### ヨブ記劇の登場人物

對話劇「ヨブ記」の本曲はヨブの家を舞臺とするものである。(ヨブ記第三章より第四十章までが夫

れである) 登場人物は最初は左の三名で、何れも違つた方面から來た者である。

エリハス——神秘主義者。迷信に類するほどの神秘的見解を持つて居る。災害には兎もすれば迷信が伴ふ。神以外の勢力——妖怪を信じ易い。彼はさうした弊に既に陥つて居る人である。想像を許されるなら、面長な眉の間に皺を寄せた、一見冥想的な長老風の人か。

ビルダテ——經驗派の人、實行的な人。實踐的な歴史から凡べてを解釋する人。人間の歴史は、儒學の所謂「勸善懲惡」の歴史なりとする人。人間は初めから悪いものと考へ込んで居る人。先づドール樽然と肥えた人か。

ソバル——神秘的でも、經驗派でもなく、哲學的な人。哲學といつても、眞の哲學でなく傳統的な組立で行く神學者、智慧を重んじ理窟一點張りで行

かうとする人。型にはまつた神學者風の人。四角張つた顔でもして居やうか。

續いてヨブが美しい詩で厭世觀を述べ右の三人と議論をして居る時、何時來たともなく其處に現はれる若い男がある。エリフが夫れである。

エリフ——大學を先日出た許りといふやうな若者、論理に長けた詩人肌の人此外に東洋風のヨブの妻が、友人とヨブの對話中、遠くから憫みの目を以て見て居る事も忘れてはならぬ。彼女は肉體が腐敗して行つて、臭氣のある良人に對し、性慾關係を離れて親切を盡して居る女性である。

又ヨブは富を失ふて、貧相な搔卷を着、痒い處を掻き乍ら、東洋的な哀號の聲を擧げて横になつて居る。

此等の人物に依つて長い對話劇は作られる。

#### ヨブ本曲の梗概

ヨブ記本曲の梗概は、先づザツと斯うである。

#### 本曲

ヨブ——死に憚る。

三章

エリハズ——神秘なる立場より、人は神より義ならずと主張す。

四、五章

ヨブ——友の慰めの無効を説き、人生苦を訴ふ。

六、七章

ビルダテ——歴史的に論じて、神を忘るゝ者の滅亡を論ず。

八章

ヨブ——神の全能を論じ、神は善者と悪者を等しく滅ぼすを云ふ。九、十章 47

ソバル——ヨブの智慧の淺薄を罵り、神に罪を懺悔せよとす。十一章

ヨブ——彼等に智慧の分らざるを主張し、悪人の榮え、人生に望みなく、再生なきを悲しみ、神にのみ訴へんことを主張す。 十二、十三、十四章

エリハズ——ヨブを犯人と罵り、祈禱なき人と云ひ、人間及宇宙の惡を説き傳統を尊び、選民主義を主張し、神に敵するものとしてヨブを攻撃し、そ

の亡ぶる様を他人にことよせてあてこする。

十五章

ヨブ——友人に歸つてくれと促し悲觀す。

十六、十七章

ビルダテ——後世の戒めのために悪人は亡ぶ、ヨブの困難も後世への戒めだと云ふ。

十八章

ヨブ——環境の不遇を訴へ、妻、僕、友人、親戚が彼を輕するを述べ、贖主は活くと主張す。

十九章

ソバル——理性は私をして云はしむと云ひ、悪人の盛ゆるは暫しだと云ひ、後はヨブをあてこする。即ちヨブが貧民の壓制者だとあてこする。二十章

二十章

ヨブ——悪人の盛ゆることを主張す。

二十一章

エリハズ——ヨブが悪人であることを主張し、貧民の壓制者であることを罵言す。

二十二章

ヨブ——求道者の志を明かにし、社會惡を嘆く。

二十三章

ビルダテ——人間の性惡、宇宙の神の前に輝かざるを説く。二十四章

二十四章

ヨブ——自己の完全を主張し、智慧に憚れ過去の生活を追想し、いはれなき侮辱を悲しみ、己の正しさを飽まで主張す。二十五、三十一章

二十五、三十一章

エリフ——ヨブの友人の愚を罵り、ヨブの無智を主張し神の人より優れたるを主張す。三十二、三十七章

三十二、三十七章

神——ヨブに語る、美しき自然を語り、ヨブに「丈夫たれ」と云ふ。

49

ヨブ——神と語りて満足す。三十八、三十九章

三十八、三十九章

神——河馬と鱉に就て物語る。四十章、三、四節

四十章、三、四節

終曲——ヨブ再び健康を回復し榮ゆ。四十一章、四十二章

四十一章、四十二章

神へ向つての抗爭

ヨブは終始議論に敗けてはゐない。三人の友の激しい質問の矢を、勇敢に彈

き返して居る。

かと思ふと、彼は友人には關係なく謔言のやうに獨り言を言つてゐる。夫れは美しき詩である。

### 白銀の詩

白銀は掘りだす穴あり、煉るところの黄金は出處あり、鐵は土より取り、銅は石より溶して獲るなり。人すなはち黑暗を破り、極より極まで尋ね窮めて黑暗および死蔭の石を求む、その穴を穿つこと深くして上に住む人と遠く相離れ、その上を歩む者まつたく之を覺えず。是のこどく身を繩下げて遙に人と隔たりて空に懸る、地その上は食物を出し、其下は火に覆がへさるゝがごとく覆へる、その石の中には碧の玉のある處あり、黄金の砂またその中にあり。その遙は荒島もこれを知らず、鷹の目もこれを見ず、猛き獸も未だこもを踐まず、猛き獅子も未だこれを通らず、人堅き磐に手を加へまた山を根より倒し、岩に河を掘り、各種の貴き物を目に見とめ、水路を塞ぎて漏らしめ隠れたる寶物を光明に取いだすなり。然りながら智慧は何處よりか覺め得ん、明哲のある所は何處ぞや人その價を知らず人のすめる地に獲べからず。淵は言ふ我の内に在らずと。海は言ふ我と偕ならずと。精金も之に換るに足らず、銀も秤りてその價となすを得ず、オフルの金にてはその價を量るべ

からず、貴き青玉も碧玉も亦然り、黄金も玻璃もこれに並ぶ能はず、精金の器皿もこれに換るに足らず、珊瑚も水晶も論にたらず、智慧を得るは眞珠を得るに勝る。エテオピアより出る黄金もこれに並ぶあたず、純金をもつてするともその價を量るべからず。然らば智慧は何處より來るや、明哲のある所は何處ぞや、是は一切の生物の目に隠れ、天空の鳥にも見えず、滅亡も言ふ我儕はその風聲を耳に聞し而已、神その道を曉りたまふ。彼その所を知りたまふ。そは彼は地の極までも觀そなはし天が下を看きはめたまへばなり、風にその重量を與へ、水を度りてその量を定めたまひし時、雨のために法を立て、雷霆の光のために途を設けたまひし時、智慧を見て之を顯し、之を立て試みたまへり。また人に言ひたまはく、禍よ主を畏るゝは是智慧なり、惡を離るゝは明哲なり。(第二十八章)

白銀は掘出す事が出来ても、智慧はどこからも發掘する事が出来ない。その筈だ。それは神のみの知り給ふ處だ。——といふのである。

ヨブは又對話中、いつの間にか神に對して祈つてゐる。否、祈るといふよりも、神に對抗してゐると言ふ方が適當である。

「わが苦しきは神が攻め給ふからだ。併し私は敗けませぬぞ」と、個性を引締

めて、神に對抗してゐるのだ。其處に神とヨブとの抗争がある。

今日の人なら泣く處を、ヨブは勇敢に神に抗争してゐるのだ。そしてヨブは三人の友が冗々しい議論をするのに業を煮して「木ツ葉輩、黙つてろ。俺は神と議論をするんだ」と放言して居る。何といふ大膽不敵であらう。

我は全能者に物言はん

汝らが知るところは我も知る。我は汝らに劣らず、然りと雖も我は全能者に物言はん。我は神と論ぜんことをぞむ、汝らは只虚言を造り設くる者、汝らは皆無用の醫師なり、願はくば汝ら全く黙せよ。然するは汝らの智慧なるべし。請ふわが論する所を聽き、我口唇にて辨争ふ所を善く聽け。

(第十三章二節——六節)

黙してかゝはらざれ

黙して我にかかはらざれ、我言語んとす、何事にもあれ我に來らば來れ。(第十三章十三節)

更に甚しきは「低能兒!とつとと歸りやがれ、そして顔を洗つて明日來い」と惡罵してゐる箇所さへある。

汝らは智からず

乞ふ汝ら皆ふたゝび來れ我は汝らの中に一人も智き者あるを見ざるなり。(第十七章十節)

然うだ。ヨブに取つては、三人の友は問題ではない。彼は神と抗争するのであつた。

神とヨブの激論——夫れがヨブの祈りである。

### 強きヨブ的精神

今日の基督信者の祈は、型がきまつて居る。その理由は、彼等が自分一箇を考へて、神の事を考へないで祈るからだ。ヨブは神が間違つて居るから、間違つてゐるとして神を攻撃して居るのだ。それほどヨブの靈は成長して居た。今日の人は電燈のスイッチがつかぬといつて心配し、花が散かつたからといつて氣を揉んでゐる。そんな事で何にならう。

世界の平和を祈り、勞働階級の解放を祈り、神の御心を地にやらせ給へとの

大膽な祈りを何故しない。之れ資本主義化した基督教が嫌はれる理由である。社会主義運動を見よ。彼等の歌は、祈は、血に煮込んでゐるではないか。さればこそ、人は多く社会主義に共鳴し、その歌は我等の熱涙をそゝる。教會は何故そうした深刻な歌を唄はぬのだ。それは、今日の教會にヨブ的精神が缺けて居るからだ。宇宙の實在に挑戦する勇氣なくば、我等の讚美は、固結して飛出さなくなるであらう。

成熟した靈は戯曲をも恥じとしない。我等の靈は、劇場にあつても決して差支へない。私は嘗て神戸聚樂館でアンドレーフの「人の一生」の芝居を見た。その中に貧乏な畫家の妻が、じめ／＼とした暗い地下室にあつて、行詰つた夫の爲めに祈る場面があつた。私は泣かされた。私は教會と劇場との區別がつかなくなつて了つた。

今後の宗教は、教會内に閉ぢ籠つてゐては駄目だ。劇場を、森を、實驗室を

淺草を、道頓堀を征服して、其處にイエスの十字架を打ち立てねば駄目だ。ヨブの強い理由は此處にある。我等はモウ一度ヨブの精神で出直さねばならない。教會をのみ神聖とする時代は夙に過ぎた。芝居も、遊戯も、生活も皆纏めて父なる神とイエスに拉し來るのでなくして、何の基督教があらう。社会主義を怖れてはならぬ。況んや芝居を怖れてはならない。夫等を皆基督に捧げれば善いのだ。

斯うした氣分がヨブ記の全部である。

### 第三章 ヨブ記に現れし完全人問題

#### ヨブの個性

ヨブは完全人であつた。ヨブ記の冒頭に「その人爲完全、且つ正しくして、神を畏れ、惡に遠ざかる」とあるのを看過してはならない。

彼は智、情、意に於ても、又性格、信仰に於ても、個性として他の追従を許さぬ人物であつた。先づ個性としてのヨブを見やう。

(イ) 智

われ細かに汝らに聞きしか、汝らの中にヨブを言ひ伏す者一人もなく、又彼の言葉に答ふる者なし。恐らくは汝ら言はん、我ら智慧を見得たり、彼に勝つ者は唯だ神のみ、人は能はず。(第三十二章 二——一三節)

我は智慧に於て汝の下に立たず誰か汝らの言し如き事を知らざらんや(第十二章三節)  
汝らが知るところは我もこれを知る。我は汝等に劣らず(第十三章二節)

汝面は泣きて敵くなり我目縁には死の蔭あり然れども我手には不義あること無くわが祈禱は潔し

(第十六章十六——十七節)

わが口は悪を言ず、わが舌は謬言を語らじ(第二十七章四節)

(ロ) 情

我わが目と約を立てたり何ぞ小艾を慕はんや然せば上より神の降し給ふ分は如何なるべきぞ高處より全能者の興へ給ふ業は如何なるべきぞ、悪き人には滅亡きたらざらんや、善らぬ事をなす者には常ならぬ災禍あらざらんや、彼我が道を見そなはし我步履をことごとく敷へ給はざらんや、我虚誕と

つれたらて歩みし事ありやしわが足詐偽に奔従がひし事ありや、請ふ公平きはかりなもて我を稱れ、然ば神われの正しきを知らたまはん、わが步履もし道を離れ、わが心もし、わが目に隨がひて歩み、我手にもし續れのつきてあらば我が擲きたるを人食ふも善し、わが産物を根より抜かるゝも善し。(第三十一章 一——八節)

(同情) 我もし貧き者にその願ふところを獲しめず寡婦をしてその目おとろへしめし事あるか、また我獨りみづから食物をくらひて孤子に食はしめざりし事あるか。却て彼らは我が若き時より我に賣てられし事父に於けるが如し我は胎内を出てより以來寡を導くことをせり。われ衣服なくして死なんとする者或は身を覆ふ物なくして居る人を見し時その腰もし我を脱せず、また彼もし我が羊の毛にて温まらざりし事あるか、われを助くる者の門に在るを見て孤子に向ひて手を上し事あるか、然ありしならば肩骨よりして我が肩おち骨とはなれてわが腕折れよ。(第三十一章十六——二十二)

(ハ) 意

我(我は道を全うせり)汝は神を畏めり、之れ汝の依り頼む處ならずや、汝らはその道を全うせり之れ汝の望みならずや。(第四章六節)

アみづから見て己れを正しとするに因りて三人の者之に答ふる事を止む(第三十二章一節)

(ニ) 性格

(獨立獨行の人) 我あに汝等我に予へよと言ひしこと有らんや、汝等の所有物の中より物を取りて



我がために餓れと言ひしことあらんや。また敵人の手より我を救ひ出せと言ひしことあらんや。或る者の手より我を贖へと言ひしことあらんや。

(悔恨なき人)われ堅く正義を持ちて之を棄じ我は今までに一日も心に責められし事なし。(第二十章六節)

(\*)信仰

われ日の輝くを見または月の輝りわたりて歩むを見し時心切にまよひて手を口に接しことあるが是もまた裁判人に罪せらるべき悪事なり我もし斯なせしことあらば上なる神に背しなり。(第三十一章二六—二八節)

### 社會人としても完全人

加之、彼は又社會人としても完全であつた。彼は人に向つては善き教師、弱者に向つては頼母しき友、貧民に對しては優れたる友であつた。

教師

汝は衆多の人を誨へ諭せり(第四章三節)

弱者の友

手の垂れたる者をば之を強くし、つまづく者をば言葉をもて扶け起し、膝の弱りたる者を強くせり、

(第四章四節)

貧民の友

われ助力を求むる貧しき者を救ひ、孤兒及助くる人なき者を救ひたり、亡びんとせし者我を視せり、我亦寡婦の心をして喜び歌はしめたり、われ正義を着、又正義の着る所となれり、我が公義は上着の如く冠りの如し、我は盲者の目となり跛者の足となり、貧しき者の父となり、知ざる者の訴訟の由を究め、悪き者の牙を折り、その齒の間より獲物を取らせり(第二十九章一二—一七節)

今日の有産階級に發見し得ない人格を、ヨブは持つてゐたのであつた。

又彼は僕婢に對しても決して無茶はしなかつた。當時奴隸の持主は奴隸に對して總ゆる權力——生殺與奪の權をさへ持つて居たが、ヨブは夫れにすら親切であつた。否、彼は敵をすら愛した。

僕婢に對する親切、わが僕或は婢の我と辨争ひし時我もし之が權理を輕んぜし事あらば神の起あがり給ふ時には如何せん、神の臨み給ふ時には何と答へまつらんや、われを胎内に造りし者また彼をも作り給ひしならずやわれらを腹の内に形造り給ひし者は唯一の者ならずや。(第卅一章十三—一

我若し我を惡む者の亡るを喜び又はその災に罹るによりて自ら誇りし事あるか(第卅一章二九節)  
 斯うした完全人であつたから精神の持方で神の罰を受くるやうな理由はなかつた。故に彼に降り來つた災厄が、神の與へた外部的の罰だとはどうしても解

釋は出來ない。  
 彼は自ら潔し、我は全しと自ら告白してゐるほどである。

自ら潔し(十章二)

我は全し(十二章四節)

我は全し、然れども我はわが心を知す、わが生命を賤む(第九章二一節)

然うだ。ヨブは完全人であつた。彼は第一人者として堅い信仰を持つて居た。彼は殆んど完全な新しき發見された人格である。

決定説との戦ひ

ヨブ記に現れた完全人は、最も新しき意味に於ての近代的人格である。徹底したる個性に反映する社會的地位に於て、今日の人間を見るやうな氣がする。意志の強い、感情の峻烈な、智的慾望の該博な、そして厭世的傾向と宗教的色彩のある人格は、二十世紀の偉大なる人物のやうである。

此の完全人といふ事が肯定されるやうになつたのは、十九世紀以後の事である。

十八世紀までの傾向は人間に完全人はないとするのであつた。ソバルやビルダテの考へ方はそれであつた。

彼等の考へを以てすると人間は或るところまで行けば行詰るものである。人間は畢竟物質で支えた機械だ。——斯ういつた或る決定論的の考へが、彼等の考へであつた。ヨブは之に反抗して、人間の本質にあきらめをつける必要のない事を論じて居るのである。

神より出しは誰の靈か

「プロコたへて曰く、なんぢ力なき者を如何に助けしや。氣力なきものを如何に救ひしや。智慧なき者を如何に教へしや。さとり道の道を如何に多く示めしや。なんぢ誰にむかひて言語を出せしや。汝より出しは誰が靈なるや(第二十六章一—四節)」

十八世紀までは神の尊嚴を極端に云々して、人間をうじの如くに輕視した。併し神より出たものは神の性質を持つて居る筈である。靈の内から或る力を以て跳ね返す時、決定を打破る事が出来るのであつた。それは破壊ではない。内の更改である。此の更改が社會を潔めるのである。蛆として決定したものではない。全主義の理想と決定主義の理想の争ひだ。カルビンとメソジストとの争ひだ。

奴隸を解放したのはメソジストである。金持は奴隸の解放に反對した。今日マルクス派は決定論を説く。世界は行詰つた。最早革命あるのみと。併し我等は此の決定論に反對する。

世界は行詰つたかも知れない。併し未だ残されたものがありはせぬか。靈の奥底の神の與へ給ひし秘密があるではないか。苦痛もあらが、尙此の残された秘密のある事を信じて、神と争ふまでに強く争つて行かうではないか。——之れが我等の主張である。我等はヨブの思想を酌んで、世界の渦巻の中に勇敢に戦はねばならない。神はヨブに向つて斯う忠告し給ふて居る。

丈夫の如くせよ

茲にエホバ大風の中よりヨブに答へて宣まはく

「なんぢ腰ひきからげて丈夫の如くせよ我汝に問ふ、なんぢ我に答えよ(第三十八章一節及第四十五章七節)」

我等はヨブを通じて流るゝ神の忠告を受け容れて強く、そして終りまで第一人者たるべく戦はう。疑惑の陥穽に陥る事なく、強く生きて行かう。靈を成長せしめて、偉丈夫の如く戦つて行かう。

### ヨブ自らの告白

ヨブは自らを信づる事が深かつた事は曩に述べた。併し夫れは決して偽善ではない。又偽悪でもない。

或人は偽善をしないで偽悪をして居る。態々悪事をして得々としてゐるのが夫れである。悪人でもないのに悪事を多くしたやうに見せつける類が夫れである。人間は眞の善も出来憎いものであると共に、眞の悪といふものも容易に出来るものではない。それをサモ大きな悪をしたやうに誇張して誇りがに語るのが偽悪者である。

自然主義の流行したデカタン時代には此種の偽悪が流行した。ボードレールの如きは、態々美しき友情、清き信仰の部分を除き去して、悪を讃美した。屍體墓、蛇が彼に依つて讃美された。

ヨブは自ら悪の出来ない善人とした。「自ら潔し」と言つたのはその爲めで

ある。併もその潔き者、正しき者が却つて輕んせられるのであつた。

完全者嘲らる

我は神によばゝりてきかるゝ者なるに今その友に嘲けらるゝ者となれり、嗚呼正しく、かつ完なき人嘲らる(第十二章四節)

東洋的の考へからするならば**外部的災厄**——病氣、不具、天災、戦争——の

來るのは、自分が悪事を働いた爲めに天が與へる處の罰であるとするのである。

併しヨブを以てすれば夫れは根本から誤つて居る。天災と人間の主觀乃至性格との間には何等の關係はない。神は完全人に對してすら災害を與へ給ふ。どんな立派な人物でも病氣は免れない。死は來る。天災も降る。——と言つて居る。

ヨブが斯うした強い自我を持つて居る事が、態々又彼が特別に悲劇を増した所以であつた。其處に自然的勢力と内部的勢力との摩擦があつた。

東洋流に、外部的勢力に敗けて之を因果とし、決定的の法則とするなら、ヨブの如き煩悶はない。印度的の自然に對する降伏——自我の否定——をするなら、災厄も問題にはならない。

併し、然うではなくて内側の我が生きんとし、又自らが完全人なる事を確信する場合、尙且つ外部から災害の降つて來る時、其處にヨブの煩悶が生れる譯である。ヨブ記の記述された理由は此處にある。

ヨブの人格に學ぶべき點は、ヨブが完全人なりし事、而もその完全人ヨブが友人に依つて理解せられず、ヨブの不幸は神の罰なり、彼に缺點ありし故に神罰し給ふなりと友人の主張せるに對し、ヨブが頑強に「神罰ではない。又自分の缺點の爲めでもない」と反對し、其處に災害に對する新しき解釋を下して居る點である。

惡に對する淺薄な考方は神罰とする事だ。外部的の災厄を内部的に起因せし

める事だ。併しヨブは之を制止して、自らの惡は、外部的の天災は天災と區別した。そこに我等の學ぶべきヨブの態度がある。

#### 友人の誤解

併しヨブはその友人に依つて、全然誤解されて居た。エリハズの如きは正面から彼を攻撃し、エリフの如きも亦

汝は云ふ我は罪なしと

われは潔淨くしてとがなし、我は幸なく惡き事我身にあらす。視よ彼われを攻るひまを尋れ、われをおのれの敵と算へ、わが脚をかせに夾め、わが一切の舉動に目を着たまふと、視よ我なんぢに答へん、なんぢ此事にをいて正義からず、神は人よりも大なる者にいませり。(第三十三章九——一二節)

汝は言ふ我は義なりと

ヨブは我は義し、神われに正しき審判を施したまはず。我は義しかれども偽る者とせらる、我はとがなければもわが身の失創愈えがたしと(第三十四章五——六節)

汝は言ふ我が義は神に愈れりと

エリフまた答へて曰く、なんぢは言ふ我が義しきは神にまされりと、なんぢ之を正しとおもふや。

すなはち汝いへらく、是は汝に何の益あらんや、罪を犯すに就れば何のまさるところが有ると。われ言語をもて汝をよびなんぢにそへる汝の友等に答へん。天を仰ぎて見よ、汝の上なる高き空を望め、汝罪を犯すとも神に何の害が有んとかを熾んにするとも神に何を爲し得んや。なんぢ正義かるとも神に何の與るを得んや、神なんぢの手より何をか受けたまはん。なんぢの悪はなんぢに同じき人を損せん而已、なんぢの善は只人の子を益せんのみ(第三十五章一—八節)

といつて、ヨブが自らを義なり、罪なしとせるに對して攻撃を加えて又こんな讒謗を言つてゐる。

何人がヨブのごとくならん。彼は馬を水の如く飲み、悪き事を爲す者等と交り、悪人とともに歩むなり。即ち彼いへらく人は神と親むとも身に益なし(第三十四章七—九節)

今、彼等の言ふ處を記すならばザツト斯うである。

先づエリハズは徹底的に神には悪がないと言つて居る。即ち豫定調節説(ETH EODOCY)神義説を説いて居るのであつて、宇宙に悪がないから、従つて煩悶の必要はないとする。

新プラトール派の如きも此の傾向があり、倉田百三氏も神に悪のない事を言つてゐる。

併し地球の表面には多くの貧乏人の居ることは掩ふべからざる事實である。

又宇宙にあるのは善い神のみでありとし、神を通れ場所、神祕な圓滿な絶體な調和と考へる逃避的傾向の論者もあるが、我等は之に賛成する事は出来ない。私達はヨブと同じやうに、大膽に悪い世界を肯定し之をふみしめて行かうと思ふ。

人間を忘れて神を見るな。我等は飽くまで人間性を主張する。

カントは此の調和説を以て哲學的根據のない夢であるとして反對した。

外の世界を作つて内の世界を作らぬ者に善い神も解る筈はない。トーマスアキーの倒れたものそれである。

神を安全地帯と考へる事はまちがひである。神祕的立場をとるのは誤りである。

ビルダテは、歴史的事實から歸納して、ヨブに向て「君も悪人だから斯うした苦しみを受けたのだ」と言つた。世界歴史の興亡を見るに、悪國民は皆滅亡んで居る。悪人のみが貧乏して居る——とそう思ふて居るのだ。彼は苦しみと道徳的の價値を混同して居るのである。

ソバルは智慧を尊ぶ神學者、哲學者であるが、彼は罪が苦痛を生むとした。即ち魂の病が外形的な苦痛を生むので、謂はゞ一種の神の戒めとして苦痛があると考へた。従つて罪を告白すれば、病の如きも癒ゆるものと考へた。

今日天理教が病は罪から生れるとし、罪を告白すると病が治るとするのは、ソバルの流儀である。彼等は病を道徳的起原に置いて居るもので、苦しみと道徳的の罪を混同するものである。

身體に生じた腫物の責任まで、我等が負はねばならぬと云ふ事は常識から考へても受け取り難い事實である。ヨブはそれに對して叫喚に異議を申立てた。宇宙惡、生理惡、道徳惡、總てを小さい人間の肩に負はせられるのは耐え難き事である。

ヨブは自分の責は負ふ。併し道徳惡でない部分、自分が正しき部分に就ての責任は負はぬと主張した。

即ち疾病、天災の責任を負ふ事を肯じなかつた。其處にヨブの煩悶がある。エリハズは豫定調和説を説き、信仰なき人間には苦痛が多いとして、信仰を功利的に觀、ヨブを責めて居るが、彼にとつては、信仰は一種の部屋潔めの鹽であり、惡魔除けの様なものに過ぎないのだ。彼は信仰と苦痛を混同するものであつた。

かうした友人の意見にはヨブは、些かも慰めらるゝ所なく、彼は友に「もう

歸つて呉れ」とさへ言つた。

ビルダテは後世の警めを持ち出した。「今、君の苦しんで居るのは、後世の戒めの爲めだ。悪人の滅びるのは、後世の戒めのためだ」と言つた。

併しヨブは之を肯じなかつた。

ヨブは「俺に責任はない。周囲が悪いのだ。環境と本質とを混同するな」と論駁して居る。

環境の悪は、本質の悪ではない。宇宙の原子と、自己を一緒に考へるのは誤りである。

ソバルは道徳的報酬論、因果關係を持ち出した。

「前世に悪事を働いたから、今世に悪が廻つて來るのである。今世に功德をすれば後世には善果が報ふ」とするのである。ヨブの苦しんで居るのは、因果の報いが來たのだと観るのである。

佛徒の前世の因縁と言ふのが之であり、又沖野岩三郎氏の「宿命」と言ふのが之である。

彼等は「悪をしたから苦しみが來る」と云ふのだ。併し悪と苦しみとは別物である。悪は内質的であつて苦しみは其の副作用に過ぎない。

#### 人生の戦闘の時

それ人の世にあるは戦闘にあるがごとくならずや。又其日は借人の日のごとくなるにあらすや。奴僕の暮を冀ふが如く、借人のその價を望むがごとく、我は苦しき月を得させられ、憂はしき夜をあたへらる。我臥ば乃ち言ふ、何時夜あけて我おきいでんかと曙まで顔にまるぶ。「わが肉は虫と土塊とを衣服となし、我皮は愈々また腐る。わが日は機の梭よりも迅速なり我望む所なくして之を送る。想ひ見よ、わが生命は氣息なる而已、我目は再びさいはひを見ること有じ。我を見し者の眼かされて我を見ざらん、汝目を我にむくも我は已に在ざるべし。雲の消て逝るがごとく陰府に下れる者は重れて上りきたらじ。彼は再びその家に歸らず、彼の郷里も最早かれを認めじ。然ば我はわが口を禁めず、我心の痛によりて語ひ、わが神魂の苦しきによりて歎かん。我めに海ならんや、窮ならんや、汝なにとて我を守せおきたまふぞ。わが牀われを慰め、わが寝床わが愁を解んと思ひたる時



に汝夢をもて我を驚かし、異象をもて我をおそれしめたまふ。こゝをもて我心はいきを閉んことを願ひ、我、この骨よりも死をこひねがふ。われ生命を厭ふ、我は永く生ることを願はず、我を捨おきたまへ。我日は氣のごときなり。人を如何なる者として汝これを大にし、之を心に留め、朝ごとに看そなはし、時わがす之を試みたまふや。何時まで汝われに目を離さず、我が津を咽む間も捨ておきたまはざるや。人をかながみたまふ者よ我罪を犯したりとて汝に何をか爲ん、何ぞ我を汝の的となして我にこの身を厭はしめたまふや。汝なんぞ我のとがを赦さず我罪を除きたまはざるや、我いま土の中に睡らん、汝我を尋れたまふとも我は在ざるべし。(第七章全部)

無神者の幸福を羨む時

然はあれども彼等は神に言らく我らを離れ賜へ、我らは汝の道をしることを好まず。(第二十一章十四節)

## 第四章 ヨブ記に現れし悪の問題

### ヨブ記の書かれし理由

宗教とは何か、信仰とは何か、近代の哲學者は明かにかう云つて居る。

「信仰とは、価値なき所に価値をつける事である。価値の創造である。」と

価値なきものに価値を創造すると云ふ事は、畢竟悪をかへて善とし、誤りをかへて真とし、醜をかへて美にする事に他ならない。そしてこの価値の創造は創造主の神を俟つて始めて爲し得る所のものである。然うだ。信仰は悪をも善とする。否、悪が我等を宗教に導く第一の原因となるのである。悪のない場合人間は或は目覺めずして、遂に神を拜まなかつたかもしれぬ。悪は常に宗教の第一の衝動の役を勤めて居る。

然らば、又何故此の善なる神が、災ひ、疾病等の不幸を人間に與へ給ひしか

我等は物理化學的、社會的生理的、道德的の四つの惡に惱む。何故神は我等をして之等の罪を犯かさしむるや。又此の惡に對する責任は、神の負ひ給ふ事か、それとも、我等の負ふべき處だらうか——斯うした煩悶が、我等の心に起らずには居ない。此の惡に對する根本的煩悶から、ヨブ記は書かれたのである。

### ヨブ記の三大特徴

ヨブ記には日月星辰を拜する事が記されて居るが、偶像崇拜の事實が記されて居ない處から見ると、之は極めて原始時代か、又は極めて進んだ時代かその孰れかに書かれたものと見なければならぬ。蓋し原始時代には日月星辰の禮拜あるのみで偶像崇拜がないからである。尤もヨブ記の全體の光景は頗る原始的である。隊商の去來する姿がそこに見える。

ヨブ記の書かれた時代は、多分イスラエル民族の最も成熟したる時代であつて、第二のイザヤの時代と同じ時代であるだらうと思はれる。

一體ヨブ記には三つの特徴がある。

その一は哲學的特徴である。

智慧文學が全體に裏づけられて居るのを見る事だ。智慧文學はキリスト前三世紀頃流行したものである。この智慧文學の影響を受けた爲めに、ヨブ記は他の舊約と異つて頗る内省的であり、瞑想的であり、哲學的である。従つて又眞理的である。例へば自己の醜い姿を觀照の態度に置いてゐるが如きがそれである。之はよほど成熟した者でなければ見られない心理作用である。全體に亘つて智慧に對する要求の強い事を發見する。

その二は宇宙觀が進んで居る事である。

特に天文の智識に明かで、自然の觀方の如き、イザヤ書よりも更に一段と進歩して居るのを發見する。

イザヤ書は自然自らを解放せず、道德的警諭を以て表現して居るが、ヨブ

記は自然を自然として観て居る。例へば天地創造の詩の如きがそれである。その内の一節を引照するならば

東雲の臉

その夜の晨星は暗かれ、その夜には光明を望むも得ざらしめ、又東雲の眼蓋を見ざらしめよ。(第三章九節)

「東雲の臉」——何と云ふ割切な形容であらう。大自然が眠りから醒めて行く黎明の姿が、躍如として見えるではないか。

之がイザヤ書なら、一つの譬喩を以て現すのだらうが、ヨブ記は自然をその儘に表現して居る事に注意しなければならぬ。

舊約聖書中最も雄大なる文字として知られて居る、創世記の天地創造の記事に勝る文字がヨブ記には記されて居る。

神の衣

茲にエホバ大風の中よりヨブに答へて宜まはく、無智の言葉をもて道を暗からしむる此者は誰ぞ

や。汝腰ひきからげて丈夫の如くせよ。我汝に問はん。汝われに答へよ。地の基をわが置たりし時汝は何處にありしや。汝もしさとらば言へ。汝若知んには誰が度量を定めたりしや。誰が準繩を地の上に張りたりしや。その基は何の上に奠れたりしや。その隅石は誰が置たりしや。かの時には晨星あひともに歌ひ、神の子等みな歡びて呼はりぬ。海の水ながれ出て胎内より湧いでし時、誰が戸をもて之を閉こめたりしや。かの時我雲をもて之が衣服となし、黑暗をもて之が襪襪となし、これに我法度を定め、關及び門を設けて曰く、此までは来るべし。此を越へからず。汝の高溟に止るべしと。汝生れし日より以來、朝にむかひて命を下せし事ありや。また黎明にその所を知しめ、これをして地の縁を取りて悪き者をその上より振落さしめたりしや。地は變りて土に印したることくに成り、諸々の物は美はしき衣服の如くに顯はる。また悪人はその光明を奪はれ、高く擧げたる手は折る。なんぢ海の泉源に至りしことありや。淵の底を歩みし事ありや。死の門。汝の爲めに開けたりしや。汝死蔭の門を見たりしや。なんぢ地の廣さを看極めしや。若これ汝盡く知らば言へ。光明のある所に往く路は孰ぞや。黑暗のある所は何處ぞや。なんぢ之をその境に導き得るや。その家の路を知らざるや。なんぢ之を知ららん。汝はかの時すでに生れをり、また汝の經たる日の數も多ければなり。なんぢ雪の庫にいりしや。汝の庫を見しや。これ汝が艱難の時のために蓄はへ、戦争および鬪撃の日のために蓄へ置くものなり。光明の發散る道、東風の地に吹渡る所の路は何處

ぞや。誰が大雨を瀧く水路を開き、雷電の光の通る道を開き、人なき地にも、人なき荒路にも、雨を降し、荒かつ廢れたる處々を潤はし、かつ若菜蔬を生出しむるや。雨に父ありや、露の珠は誰が生る者なるや。氷は誰が胎より出るや。空の霜は誰が産むところなるや。水かたまりて石のごとくに成り、淵の面こほる。汝昂宿のくさをりを結び得るや。參宿の繫繩を解うるや。汝十二宮をその時にしたがひて引き出し得るや。また北斗とその子星を導き得るや。なんぢ天の常經を知るや。天をしてその權力を地に施こさしむるや。なんぢ塵を雲に擧げをほくの水をして、汝を掩はしむるを得るや。なんぢ雷電を遣して往しめ、なんぢに答へて我侍は此にありと言はしめ得るか。胸の中の智慧は誰が與へし者ぞ。心の内の聰明は誰が授けし者ぞ。誰がよく智慧をもて雲を敷へんや。たれかよく天の瓶を傾け、塵をして一塊に流れあはしめ土塊をしてあひかたまらしめんや。(第三十八章)

「諸々の物は美しき衣の如く現る」——自然が着物だ。美しい富士の裾野の勾配が「神の衣」だといふのだ。

その三はヨブの時代が成熟した時代である事である。

その文章と言ひ、構想といひ、又社會的背景といひ、道徳的煩悶といひ、決して原始時代の物とは思はれない。イザヤよりも更に進んで居ると考へられる。

ヨブ記はヨブ記の著者が奴隸に賣られて、荒野を横切つて、メソポタミヤに流浪中、煩悶の末になつた物だらうと想像される。

#### サタンに對する神の注意

ヨブ記の第一頁に神と悪魔との會話がある。我等は其處にヨブ記の結論を讀む事が出来る。

ヨブ記は、文章の劈頭に解決がのつて居るのだ。即ち惡の起原に就いて未だ何等論じない先に、悪魔が神の支配の下にあつて、芝居の一役を割當てられて居る事、そこに惡に對する解決のあることに注意せねばならぬ。

換言すれば、神の下に悪魔が居て、神の使として働いて居ると云ふ事に解決があるのだ。悪魔は神のいふまゝになり、神の考へによつて悪魔が使用される其處に劇の面白い仕組があるのだ。讀者はヨブ記の他の部分に解決を捜してはならない。劇の構造それ自身に解決があるのだ。

神は悪魔を使つて、神の或る表現の道具に使ひ給ふのである。之がヨブ記の解決である。

悪はそれ自身が目的ではなく、神の爲さんとする所を表現する事が目的である。つまり神の劇の一役割を勤めるのである。従つて神は悪に對しても又責任を持つものである。

更に第二章を見ると神は悪魔に對して注意を與へて居る。即ち神のヨブに對する苦痛の加重は進行的ではあるが、生命に觸はる事を話されなかつた。

「生命を害ふ勿れ」

○ 彼を汝の手に委す、只だ彼れの生命を害ふ勿れと。(第二章六節)

つまり苦痛は進行する事はするが、其の苦痛も、或る制限があつて、神の勢力範圍を越える事を許されないのである。

如何に悲しくとも試練と云ふものは、その人が耐え得られないと云ふ範圍を

越ゆる事はない。

### ヨブの災害と厭世觀

ヨブは七つの災害を受けて居る。

- 第一災 牛と牝驢と若者ツバ人に殺され奪はる。(第一章一五節)
- 第二災 神の火天より下り羊及少者を亡す。(第一章一七節)
- 第三災 カルヤヤ人三隊に分れ來り駱駝を奪ひ若者を殺す。(第一章一七節)
- 第四災 荒野よりの大風に家潰れ子女殺さる。(第一章一九節)
- 第五災 ヨブ惡しき腫物にかゝる。(第二章七節)
- 第六災 妻彼を捨つ。(第二章九節、第十九章一七節)
- 第七災 友人彼を誤解し(第六章一五節、第二章四節)兄弟、僕、同胞、凡ての排斥。(第一六章一〇—一一節、第十九節一三—一九節)

何と云ふ災害の連続であらう。

彼は廿六章から三十三章に渡つて辛い身の上話をして居るのであつた。妻が

彼を捨てた事にしても、最初は外部的の苦しみであつたものが、後には内に進んで、遂に魂の煩悶にまで及んで居る。

ヨブの試みは肉體的であるよりは、寧ろ精神的であつた。

ヨブの病に對する煩悶の如きは、僅かその所にしか出て居ない。肉體的の苦しみは、彼にとつては大した問題ではなかつた。ヨブの煩悶は、より根本的であり、瞑想的であり、哲學的であり、精神的である事に留意しなければならぬ。

ヨブの煩悶は精神的なるが故に、根本的であつた。神が惡魔に許した四つの災ひよりも、その後起つた妻の離散、友人の誤解、兄弟、下僕、同胞の排斥は、精神的である丈に、一層苦しみが深かつた。

斯くて重なる災害に、ヨブは世を厭ふに至つた。彼は虛無主義に取りつかれたのである。彼には墓と冥路と死が最も懐しかつた。

### ヨブの厭世觀

如何なれば難にあるものに光を賜しや

如何なれば難難にたる者に光を賜ひ、心苦む者に生命を賜しや。斯る者は死を望むなれどもきたらず、これをもとむるは藏れたる寶を掘るよりも甚はだし。もし墳墓を尋れて獲ば大に喜び樂しむなり。その道かくれ神に取籠られたる人に如何なれば光明を賜ひしや。(第三章二〇二三節)

わが生命を賤しむ

我が往て復返ることなきその先に斯あらしめよ、われは暗き地死の陸に往ん。この地暗くして晦冥に等しく死の陸にして區別なし、彼處にては光明も暗黒のごとし。(第十章二一一二二節)

苦痛のために戦慄す

尙、この諸々の苦痛のために、戦慄くなり、我思ふに汝我を釋し放ちたまはざらん。(第九章二八節)

われ生命を厭ふ

われ生命を厭ふ、われは永く生る事を願はず、我を捨おきたまへ我日は氣の如きなり。(第七章一

六節)

わが心生命を厭ふ、然ば我が憂愁を包まず言ひあらはし、わが魂神の苦きによりて語はん。(第十  
章一節)

厭世的、虚無的の心持は誰にも一度はあるものである。若い變化を求める青年の心には、殊に之が多い。

一本道は面白くないのだ。

物の進歩の爲めには、綜合と分化とを必要とする。宗教運動にも之がある。分擔と競争の中に、恵みがあつて進むのだ。生命の肯定を言ふ時、一方に生命の否定から出發する。佛教は後者の虚無から出發して居る。佛教は虚無と云ふ價值を作つて行く所に價值がある。故に佛教は充分に宗教である。今日人がAと云へばBと云ひ、人がBと言へばCと言ふ者がある。之は進化のある證據である。昔は権力で之を抑へたが、今は總括的人格として之を許す。

ヨブの厭世は若々しい精神の發露である。

ユダヤ民族が、將に世界的大思潮に卷かれんとして、偶像を破壊した。キリストの生れる前に強い物が生れたのだ。之が虚無的な惡に對する煩悶であつたをして之に打ち克つ宗教として、其處にヨブが生れたのである。

近頃「何が何やら解らない」と云ふ歌が流行る。有島武郎、野村隈畔が死ぬ皆虚無主義の結果だ。ヨブにも之があつた。

ロシア革命が成功しなければきつと厭世思想がスラブ民族を訪れるに違ひない。一七八九年のフランス革命の前後に、厭世思想が歐洲の天地を卷捲した。目的を達しられぬ人は厭世的になるのだ。

セレーの如きは、神を絶體に信じ得ぬ美しき魂の持主であつたが、厭世で死んだ。其他英國の詩人はワーズワース以前は皆厭世観にかゝつた。獨乙でも、革命に失敗して、一時颶風時代があつた。

歐洲大戰亂以前にも、歐洲はデカタンに浸つて、善惡を顛倒させた。勇敢な人が革命をやつた。若し之が成功しなければ、肉慾文學が流行つて厭世が来る。今のキリスト教の勢力を以てしては、とても之を制止し得ない。自殺が流行する。子供さへが自殺をする。其處に人間苦と世界苦の問題が起つて来るのであつた。

#### 人間苦の問題

疲れた時は危険である。十九世紀に革命の成就しなかつた、其時、世紀末思想が来た。疲れると厭世思想が来る。社會運動も疲勞せぬ様におして行かねばならない。

ウイルソンは疲れて神經衰弱に陥つた。而しロイドジョージは疲れそうになると、郷里へ歸つて、靜に釣を垂れて居る。

勞働者には休息が必要である。ヴァキイオリンも、時々は弓を弛めなければな

るまい。イエスは息めと云つた。イエス自身晝寝をした。日本人は晝寝をする。と冒瀆の様に言ふが、馬力をかける爲には先づヴァキイオリンの弓を弛めるやうに休息せねばならぬ。

ヨブ記の第三章全部にわたつて、生存惡の事が記されて居る。生存惡中には生苦がある。病苦がある。老苦がある。死苦がある。心理苦がある。

又、生苦の中には、多難、疲勞、戦闘、敗北、不安、不徹底があり、心理苦には涙、煩悶等がある。

植物に再生があるのに、人間に再生はない。その爲にヨブは絶望した。然しイエスに至つて再生が説かれた。其處に新舊約の差異がある。

再生のない人生は、加藤一夫氏の所謂「救ひなき人生」である。ヨブは爛れた腫物を掻き乍ら救ひなき人生を嗟歎して居た。其處にヨブの煩悶があつた。然し思想劇ヨブ記の幕が閉ぢる時、ヨブは救ひに入るのであつた。ヨブが眞の救



ひを知る事に依つてヨブ記の幕は閉ぢるのである。

(イ) 生存悪

斯て後ヨブ口を啓きて自己の日をのろへり、ヨブすなはち言詞を出して曰く、我生れし日亡びうせよ、男子胎にやどれりと言し夜も亦然あれ、その日は暗くなれ。神の上よりこれを顧たまはざれ。光これを照す勿れ。黑暗および死蔭これをとりのどせ、雲これが上をおほへ、日を暗くする者これをおそれしめよ。その夜の黑暗の執ふる所となれ。年の日の中に加はらざれ。月の數に入され。その夜は孕む事有ざれ。歡喜の聲その中に興らざれ。日をのろふ者レビヤタンを激發すに巧みなる者これを詛へ。その夜の晨星は暗かれ。その夜には光明を望むも得ざらしめ。又東雲の眼蓋を見ざらしめよ。是は我母の胎の戸をどす又我目に憂を見ること無らしめざりしによる。我は胎より死て出でざりしや、何とて胎より出し時に氣息たえざりしや。如何なれば膝ありてわれを接しや。如何なれば乳房ありてわれを養ひしや。否らずば今は我偃て安んじかつ眠らん。然ばこの身やすらひなり、かの荒墟を己れのために築きたりし世の君等臣等と共にあり。かの黄金を有ち、白銀を家に充したりし牧伯等と偕にあらん。又人しれず墮る胎兒のごとくにして世に出ず、また光を見ざる赤子ののごくならん。彼處にては悪き者虚過を息め、うみつかれたる者、安息を得、彼處にては俘囚みな共に安然に居りて驅使者の聲を聞ず、少き者も大なる者も同じく彼處にあり。僕も主の手を離る。如何

なれば艱難に在る者に光を賜ひ、心苦む者に生命をたまひしや。斯る者は死を望むなれどもきたらず。これをもとむるは藏れたる寶を掘るよりも甚だし、もし墳墓を尋れて獲ば大に喜び樂むなり。その道かくれ神に取籠られをる人に如何なれば、光明を賜ふや。わが歎息はわが食物に代り、我呻時は水の流れそぐに似たり。我戰慄き恐れし者我に臨み、我が怖懼れたる者この身に及べり。我は安然ならず穩ならず、安息を得ず、唯艱難のみきたる。(第三章)

(一) 生苦

**多難** 婦の産む人はその日少なくて艱難多し。(第十四章一節)

**疲労** 彼いま已に我を疲らしむ。汝我が宗族をことごとく死せり。(第十六章七節)

**戦闘** 人もし死ばまた生んや。我はわが征戰の諸日の間望みをりて我變更の來るを待ん。(第十四章十四節)

**傷つきたる者** 彼は大風をもて我を撃碎き、故なくして我に衆多の傷を負せ、我に息をつかしめず苦き事をもて我身に充せ賜ふ。(第九章十七章)

**敗北** わが目は已に過ぎわが計る所わが心に願ふ所は已に敗れたり。(第十七章十一節)  
棄かれたれ執ふるために地に墜しあり。わなかれを陥しいる、爲に路に設けあり。(第十八章一〇一節)

不安 彼は大風をもて我を撃碎き、故なくして我に衆多の傷を負せ、我に息をつかしめず苦き事  
もて我身に充せ賜ふ。(第九章一七節)

不徹底(浮薄) その來ること花のごとくにして散り、其馳ること影のごとくにして止まらず。

(第十四章二節)

(二) 病苦

我は苦しき月を得させられ。憂はしき夜をあたへらる。我臥ば乃ち言ふ。何時、夜あけて我おき  
いでんかと曙まで顔に輾轉ぶ。わが肉は蟲と土塊とを衣服となし、我皮は愈々また腐る。わが日は  
櫛の棧よりも迅速なり。我望む所なくして之をおくる。(第七章三一六節)

わが氣息はわが妻に厭はれ、わが臭氣はわが同胞の子等に嫌はる。(第十九章一七節)

夜にいれげ我骨刺れて身を離る、わが身をかむ者ついに休むことなし。(第三十章一七節)

(三) 老苦

それ木には望あり。假令きらるゝとも後芽を出してその枝絶す。たとひ其根地の中に老い幹土に  
枯るゝとも水の潤露にあへば即ち芽をふき、枝を出して若樹に異らず。然ど人は死れば消うす人  
氣絶なば安に在んや。(第十四章七一〇節)

(四) 死苦

汝の手われをいとなみ、我をことごとく作れり、然るに汝今われを滅したまふなり。(第十章八  
節)

それ山も倒れて終に崩れ、巖石も移りて其の處を離る。(第十四章一八節)

(五) 心理苦

苦痛 只己みづからその内に痛苦を覺え、己みづからその心に哀くのみ。(第十四章二二節)

涙 我面は泣て赤くなり、我目縁には死の蔭あり。(第十六章十六節)

煩悶 それ全能者の箭わが身に入り、我が魂神々の毒を飯り、神の畏怖我を襲ひ攻む。野ろばあ  
に青草あるに鳴んや、牛あに食物あるにうならんや。淡き物あに鹽なくして食はれんや。蛋の白あ  
に味あらんや。わが心の觸ることを嫌ふ物は我が厭ふ所の食物の如し。願はくは我求むる所を得  
んことを。願はくは神わが希ふ所の物を我に賜はらんことを。願はくは神われを滅すを善とし御手  
を伸て我を絶たまはん事を。(第六章四一九節)

夢と幻の苦 わがとこわれを慰め、わが寢床わが愁を解んと思をる時に、汝夢をもて我を驚か  
し異象をもて我をおそれしめたまふ。(第七章一三一—一四節)

性格悪の否定 (ヨブはビルダテの根本に對し極力反對した)

人如何なる者として汝これを大にし、之を心に留朝ごとくに之を看そなはし、時わかず之を試みたまふや。何時まで汝われに目離さず、我が津を咽む間も我を捨ておきたまはざるや。(第七章一七一―一九節)

斯うした苦しみの中にも、ヨブが尙一つ肯定しなかつた事は、人間が根本から悪いといふ事に關してであつた。其處にヨブの強味がある。

### 世界苦の問題

今の世界では、結局悪人が榮えて、善人が壓倒される傾向がある。遊女屋の娘が、良家へ嫁ぎ、女郎屋の亭主が、名譽職に當選する。

ヨブの煩悶は此處にあつた。社會の各方面には到るところに悪が発見せられる。

### (ロ)世界苦

實在の恐怖 汝、夢をもて我を驚かし、異象をもて我をおそれしめたまふ。(第七章一四節)

理由なき惡 假令われ義かるとも、我口我を惡しと爲さん。假令われ完全かるとも、尙われを罪ありとせん。我は全し、然どもわが心を知らず、我生命を賤しむ、皆同一なり。故に我は言ふ、神は完全者と惡者とを等く滅したまふと。(第九章二〇―二二節)

盲目の世界 我が日は機の梭よりも迅速なり、我望む所なくして之を送る。想ひ見よ我が生命は氣息なる而已、我が目は再びさいはひを見ること有らじ。(第七章六―七節)

決定の惡 是に目を離して安息を得させ、之をして僮人のその日を樂しむがごとくならしめたまへ。(第十四章六節)

偶然の惡 なにゆえに全能者時期を定めおきたまはざるや。何故に彼を知る者、その日を見ざるや。(第二十四章一節)

### 道德惡、社會惡、宗教惡

ヨブは更に「神は標準を誤つて居る。神は虐政を施して居る。權力階級が繁榮して無産者階級が沈臨する」——斯う言て道德惡を指摘し、神に對して彈劾

を試みて居る。此處にヨブと神との對抗がある。

神が新手に新手を加へて彼を責め虐むるに對して彼は毅然として反抗して居るのだ。

### (ハ) 道德惡

惡の勝利が 災ひの遂に人を誅す如き事あれば彼は罪なき者の苦難を笑ひ見給ふ。世は惡しき者の手に交されてあり、彼又その裁判人の面をおほひたまふ。若し彼ならずは、之れ誰の行爲なるや。

(第九章廿三—廿四節)

掠奪ふ者の天幕は繁榮え、神を怒らせ、自己の手に神を携さふる者は安泰なり。(第十二章六節)  
ヨブこたへて曰く、請ふ汝等わが言を謹で聽き之をもて汝らの慰藉に代へよ。先われに容して言はしめよ、我が言る後なんぢ嘲るも可し。わが怨言は世の人のの上につきて起るものならんや、我なんぞ氣をいらだつ可らざらんや。なんぢら我を視て驚き、手を口にあてよ。われおもひまはせば長くなりて身體しきりに戰慄く、惡き人何とて生きながらへ、老ひかつ勢力強くなるや。その子等は其の周圍にありてその前に堅く立ち、その子孫もその目の前に堅く立べし、またその家は平安にしておそれなく、神の杖その上に臨まじ。その牡牛は種を與へて過らすその牝牛は子を産てそこなふ事

なし、彼等は其の少き者等を外に出すこと群のごとし、その子等は舞をどる、彼等は鼓と琴をもて歌ひ笛の音によりて樂み、その日を幸福に暮しまばたくまに陰府にくだる。然はあれども彼等は神に言らく、我らを離れ給へ、我らは汝の道をしることを好まず、全能者は何者なれば我等これに事ふべき、我情これに祈るとも何の益を得んやと。視よ彼らの福祿は彼らの力に由にあらざるなり惡人の希圖は我の興する所にあらず、惡人のその燈火を滅るる事幾度ありしか、その滅亡のこれに臨む事、神の怒りて之に艱苦を蒙らしめたまふ事、幾度有しか。かれら風の前の藁の如く、暴風に吹きさらるる糠殻の如くなること幾度有しか。神かれのとがを積たくはへてその子孫に報ひたまふか之を自己の身に報ひ知しむるに如す。かれをして自らその滅亡を目に視させ、かつ全能者の震怒を飲ましめよ。その月の數すでに盡るに於ては、何ぞその後の家に關る所あらん。神は天にある者等をさへ審判きたまふなれば誰かよくこれに知識を教へんや。或人は繁榮を極め全く平穩にかつ安眠にして死に、その器には乳充ち、その骨の髄は潤はへり。また或人は心を苦しめて死し、終に福社をあぢはふる事なし。是等は俱に齊しく、塵に臥して蛆におほはる。我まことに汝らの思念を知り、汝らが我を攻撃んとする計略を知る。なんぢらは言ふ王侯の家は何に在る、惡人の住所は何に在ると。汝らは路行く人々に問ざりしや、彼らの證據を曉らざるや、すなはち滅亡の日に惡人遣され烈しき怒の日に惡人たづさへ出さる。誰か能かれに打向ひて彼の行爲を指示さんや、誰か能彼の爲

したる所を彼に報ゆることをせん。彼はかゝれて墓に到り、塚の上にて守護ることを爲す。谷の土塊も彼には快し、一切の人その後に従がふ。その前に行る者も数へがたし。既に是の如くなるに汝等なんぞ徒に我を慰めんとするや。汝らの答ふる所はたゞ虚偽のみ。(第二十一章全部)

●なんぢ能力なき者を如何に助けしや。氣力なきものを如何に救ひしや。(第二十六章二節)

悪者と善者と同時に亡ぶ。この地は暗くして幽冥に等しく、死の陰にして區分なし、彼處にては光明も暗黒のごとし。(第十章二二節)

### (二) 社會惡

なにゆえに全能者時期を定めおきたまはざるや。何故に彼を知る者その日を見ざるや。人ありて地界を侵し、群畜を奪ひて牧ひ孤子のろばを驅去り、寡婦の手を取りて質となし、貧しき者を路より推退け世の受難者をして盡く身を匿さしむ。視よ彼等は荒野ろばにをる野のごとく出て業を爲して食を求め、野原よりその子等のために食物を得。圖にて悪き者の麥を刈り、またその葡萄の遺餘を摘む。かれらは衣服なく裸にして夜を明し、覆ふて寒氣禦ぐべき物なし。山の暴雨に濡れ庇はるゝところ無しして岩を抱く。孤子を母の懷より奪ふ者あり、貧しき者の身につける物を取りて質となす物あり。貧しき者衣服無く裸にて歩き、飢つゝ麥束を擔ふ。人の垣の内にて油を搾め、また湯きつゝさかぶねを踐む。邑の中より人々の呻吟たちのぼり、傷けられたる者の叫喚おこる。然れども

神はその怪事を省みたまはず。また光明に背く者あり、光りの道を知ず、光の路に止らず。人を殺す者よあけに興いで受難者や貧しき者を殺し、夜は盜賊のごとくす姦淫する者は我を見る目はなからんとてその目に昏暮をうかがひ待ち、而してその面に覆ふ物を當つ。また夜分家を穿つ者あり、彼等は晝は閉こもり居て光明を知ず。彼等には晨は死の蔭のごとし。是死の蔭の怖しきを知ればなり。彼は水の面に疾ながら、物の如し、その産業は世の中のろはる。その身重ねて葡萄園の路に向はず尤早および炎熱は雪水を直に乾涸す、陰府が罪を犯せし者におけるも亦かくのごとし。これを宿しつゝ腹これを忘れ、蛆これを好みて食ふ。彼は最早世におほえらるゝこと無く、その惡は樹の折るがごとくに折る。是すなはち孕まず産ざりし婦人をなやまし、寡婦を憐まざる者なり。神はその權能をもて強き人々を保存へさせたまふ。彼らは生命あらじと思ふ時にも復興る。神かれらに安善を賜へば彼らは安らかなり。而して、その目をもて彼らの道のみそなはしたまふ。かれらは旺盛になり、暫時が間に無なり、卑くなりて一切の人の如くに没し、麥の穂の如くに斷る。すでに是の如くなれば誰か我の謬まれるを示してわが言語を空しくするを得ん。(第二十四章全部)

權力者の繁榮 惡き人何とて生ながらへ、老いかつ勢力強くなるや。(第二十一章七節)

無産者の悲哀 人の垣の内にて油を搾め、また湯きつゝさかぶねを踐む、邑の中より人々の呻吟たちのぼり、傷けられたる者の叫喚おこる。然れども神はその怪事を省みたまはず。(第二十四章

ドン底の苦 わが疾病の大なる能によりて、我が衣服は醜き様に變り、真心の盡の如くに我身に固く附く。神我を泥の中に投、み給ひて我は塵灰に等しくなれり。(第三十章一八一—一九節)

## (ホ)宗教惡

神との對抗 われ神に申さん、我を罪ありとしたまふ勿れ、何故に我とあらそふかを我に示したまへ。(第十章二節)

もし頭を擧なば獅子のごとくに汝、我れを追打ち、我身の上に復なんぢの奇しき能力をあらはしたまはん。(第十章一六節)

なんぢは彼を永く攻なやまして去ゆかしめ、彼の面容を變らせて遙やりたまふ。(第十四章二〇節)

虚しき言語あに終極あらんや。汝なにに勵まされて應答をなすや。我も亦汝らの如くに言ことを得、もし汝らの身わが身と處を換へなば我は言語を練りて汝らを攻め、汝らにむかひて首を搦ことを得。また口をもて汝らを強くし、唇の慰藉をもて汝らの憂愁を解事を得るなり。たとひ我言を出すとも、我憂愁は解けず、黙するとても何ぞ我身の安なることあらんや。彼いま已に我を瘦らしむ

汝わが宗族を盡く荒せり。なんぢをして鼓らしめたり、是われに向て見證をなすなり。また、わが瘦おとろへたる状態わが面の前に現れ立て我を攻む。かれ怒てわれをかき裂きかつ暗め、我にむかひて齒を噛み鳴し我敵となり、目を鋭して我を見る、彼ら我にむかひて口を張り、我を踐しめて我が頬を打ち、相集まりて我を攻む。神われを邪曲なる者に交し、悪き者の手に擲ちたまへり。我は安穩なる身なりしに、彼いたく我を打惱まし我を執へて我を打碎き、遂に我を立てまとなしたまひ、その射手われを繞り圍めり。やがて情もなく、我腰を射透し、我が胸を地に流れ出でしめたまふ。彼は我を打敗りて破壊に破壊を加へ、勇士のごとく我に奔かかりたまふ。われ麻布をわが肌に見えつけ、我角を塵にて汚せり。我面は泣て赤くなり我目縁には死の蔭あり。然れども我手には不義あること無く、わが祈禱は清し。地よ我血を掩ふなかれ。我號呼は休む處を得ざれ。觀よ今にても我證となる者天にあり、わが眞實を表明す者高き處にあり。わが朋友は我を嘲けれども我目は神にむかひて涙を注ぐ。願くは彼人のために神と論辨し、人の子のためにこれが朋友と論辨せんことを。數年すぎさらば我は還らぬ旅路に往くべし。(第十六章三節以下)

四方より我を毀ちて失しめ、我望を樹のごとくに根より抜き、我にむかひて震怒を燃し、我を敵の一人と見たまへり。(第十九章一〇節)

然りと雖とも我は全能者に物言はん。我は神と論ぜん事をのぞむ。汝らは只いつはりを設くる者

汝らは皆無用の醫師なり。願はくは汝ら全く黙せよ。然するは汝らの智慧なるべし。請ふ我が論ずる所を聴き、我が唇にて辯争ふ所を善く聴け。神のために汝ら悪き事を言ふや、またかれのために虚偽を述るや。汝ら神のために編よるや、またかれのため争はんとするや。神もし汝らをしらべ給はゞ豈善らんや。汝等人を欺むくごとくに彼を欺むき得んや。汝等もし密に私しするあらば彼かならず汝らを責めん、その威光なんぢらを懼れしめざらんや、彼を懼るゝおそれ汝らに臨まざらんや。汝らのさとしは灰に譬ふべし、なんぢらの城は土の城となる。黙して我にかゝはらざれ。我言語んとす、何事にもあれ我に來らば來れ、我なんぞ我肉をわが齒の間に置きわが生命をわが手に置かんや、彼これを殺すとも我は彼に依頼まん。惟われは吾道を彼の前に明かにせんとす。かれまた終に我すくひとならん。邪曲なる者は彼の前にいたること能はざればなり。なんぢら聽よわが言を聴けわが述る所をなんぢらの耳に入しめよ。視よ我すでに吾事を言並べたり、必ず義しとせられんと自ら知る。誰か能われと辨論ふ者あらん、若らば我は口をとちて死ん。惟われに二つの事を爲したまはざれ。然ば我なんぢの面をさけて隠れじ。なんぢの手を我より離したまへ、汝の威嚴をもて我を懼れしめたまはざれ。而して汝われを召したまへ。我こたへん、又われに言はしめて汝われに答へたまへ。汝のとが我の罪いくばくなるや、我の背反と罪とを我に知しめたまへ。何とて御面を隠し我をもて汝の敵となしたまふや。(第十三章三一―二四節)

我この怨訴をその御前に陳べ、口を極めて辯論はん。(第二十三章四節)

### ヨブの苦悶の演出に就て

最後にヨブの苦悶を演出するについて、作者の苦心に注意しなければならぬのは、彼が

- 一、人生苦を述べ、厭世思想を述べ(第三章)
- 二、人生の戦闘なるを述べ(第七章)
- 三、一般的形而上的、宇宙惡を述べ(第七章六節)
- 四、神との對抗に最高煩悶を訴へ(十、十三、廿三章)
- 五、更に内部的になり倫理惡を訴へ(第廿一章)
- 六、社會惡に煩悶し(第廿四章)
- 七、私の問題につき苦悶す(第廿六章)

る點である。即ち最初は形而上の宇宙惡を述べ、次で神との對抗の最高の煩悶を訴へ、更に體驗の歎きに移つて居るのである。

宇宙悪は飯を食ふ時には休めて居るが、日常生活の苦悶は、夫れが切實であるだけ、大問題になる。パンを與へられない時には、その苦悶は哲學上の煩悶よりも大となる。

最初は總論的の苦痛、理論的の煩悶であるが、漸次體驗に入ると共に、手近なパンや寢卷の問題に煩悶する様になるのだ。ヨブ記の著者が如何に用意ある書き方をして居るか、窺はれるではないか。

ヨブは悪人の却て榮える事を説明してその誤りを指摘して居るのである。

#### 神が與へた惡の解決

エリハズは又ヨブが貧しき者を苦しめる者だと論難し、剩へ彼を山師だと罵つた。正に誤解の頂上である。

由來、先覺者は誤解の的となるものである。メソジストのウイルバアアオスも、その奴隷解放運動を起さんとして反對を受けた。英國議會すら彼の運動を

妨げた。

シヨン、ブラウンが奴隷解放の運動をした時、コンネツチカット州の教會がその邪魔をした。反對者は多くは地主、金持であつた。金持は多くカルビン教に屬してゐたのである。

フランシス、パットラーが廢娼運動を行した時も、世間の罵倒の的となつた當時タイムスすら之を攻撃した。

進歩のない處に分離はない。ヨブの考へは進歩してゐた。否進歩し過ぎて居た。それが爲めに却つて一般の誤解を受けたのであつた。

エリハズはその誤解せる者の一人であつたが、彼は後にヨブにその罪を贖つて貰ふ人である。

ビルダテは經驗の方面からヨブを攻めた。彼はヒュームの如き考へを持つ者である。即ち、彼は神以上に經驗を重する人間であつた。それで實に奇妙な立



場を取ることにまつた。

彼は又原罪論者であつた。神のみは正しいとしても、夫れに依つて創られた人間は駄目であるとした。ヨブの苦しみは彼が嘗て犯した罪の報ひとして當然受くべきものだとした。親の罪を子が受けるとするのが彼れの説であつた。否、ヨブの罪は天地創造からの惡の報ひだとした。

又彼に言はしむれば宇宙は相對性のものである。苦みも相對の中になければならない。といふのであつた。つまり「あきらめ」論者である。本質的相對説の把持者である。

相對的にみれば道德にも標準はない。今、善でも明日は惡になるかも知れないといふのである。

或人が自己の變發の四角關係に就て告白して「今それが善いか、惡いか分らぬ」と言つてゐる。そうした相對性の部分がビルダテの考へであつた。

ヨブは之に反對した。本質的惡、宇宙惡に反對して、飽くまで道德的善のありを力説した。そして彼れ自らの善を主張した。

エリハズも長い議論をしてヨブ及び三人の友の双方を罵つた。此時神が美しき自然を物語つて問題の解決を與へた。

惡の解決は神それ自身にあるといふ事。ヨブの戰は善い。而し更に強くなれ「丈夫の如くなれ」といふ事——を神は物語つた。之を聞いてヨブは「分りました」と答へた。

オイツケンアイツケンの惡の問題に對する解決として「神は惡に打克つ勝利の福音である」といふのであつた。哲學を歴史的に考へたオイツケンが、惡を解決するものが哲學でなく宗教であるとした處が面白いではないか。

然うだ。惡に勝つには丈夫の如く強く緊張する事に俟つより外はないのだ。惡に對して戰慄してゐては逆でもそれに勝てない。丈夫の如くに向つて行く、

事だ。換言すれば行動で勝つたのだ。

腰ひつからげて丈夫の如くなれ。瞑想的煩煩を離れ、大膽に、丈夫の如く行動せよ。

悪に勝つのは思想でなく、行動である。

少しでも世を善くする爲めに行動する時、其處に自ら悪に對する解決がある。

世は暗闇でも、善に向つて突進せよ。

強くなつて先づ自らが悪に打克つ工夫をせよ。善とは悪に打克つ工夫だ。

ヨブは立てられて友人の爲めに贖ひをさられた。そこで悪の解決がついたのだ。

我等もヨブの如く、善に向つて猛進しやう。

## 第五章 ヨブの友の反對論

### 定見なきエリハズ

思想劇『ヨブ記』の登場人物は

神エホバ、サタン、ヨブ、ヨブの友、エリハズ、ビルダテ、ソバル、エリフ其他

であるが、ヨブの四人の友エリハズ、ビルダテ、ソバル、エリフは、一體ヨブを如何に見てゐたか。

四人の友は、何れもヨブとは全く異つた性格なり思想を持つ者である事は、第二章に於て説明した如くであるが、ヨブ記の作者は此の四人の友を拉し來つて種々の芝居を演じさせて居るのである。宇宙惡、人間惡の解釋を各方面からさまざまに説明させて、此の思想劇をして愈々波瀾多からしめて居るのであ

る。

ヨブ記は前後四十二章に亘る長篇の芝居であるが、その内ヨブの獨白が二十章を占めて居る。此の部分は美しき詩である。散文詩である。

終り——三十八章以下は神とヨブの對話になつて居る。之れも亦美しい散文詩である。

エリフの會話の部分も終りは散文詩になつて居る。そして此の美しい詩の中へ、友人の話が美しき文章といふよりも、理窟でもつて盛られて居る。而も此の美しい詩と、友人の理窟とが、全體としては綺麗に統一されてゐて、其處に各登場人物の人格が浮彫の如くに見える。

各人物の所説に就ては第二章にも略述したが、更に詳述して見たい。先づエリハズから説明を始めやう。

エリハズは最初おすくとヨブに近寄つて来て、

離れて行く——と。

#### 人間に對する不信用

エリハズは又富と人格とを混同した言論をしてゐる。貧因と不人格者とを同一に見て居る。幸福な人を善人とし、不幸な人を悪人と看做して居る。

#### 富と人格の混同

請ふ汝は神と和らぎて平安を得よ。然らば福祿なんちに來らん。請ふかれの口より教誨を受け、その言語をなんぢの心に藏めよ。なんぢもし全能者に歸向り、且つなんぢの家より惡を除き去ば汝の身再び興されん。なんぢの寶を土の上に置き、オフルの黄金、蘇河の石の中に置き。然れば全能者なんぢの寶となり、汝のために白銀となりたまふべし。而して汝は又全能者を喜び且神にむかひて面をあげん。(第二十二章二一——二六節)

エリハズは又迷信深き人物であつた。彼は深夜闇の中に幻を見た。又一つの靈があつて彼の耳に囁いた。恰も夫れは御靈移しの如くである。

幻に見し靈

「君、言葉をかけても善いかい。本統に同情に耐えないよ。君のやうに、多くの人を誨へ諭し、弱い者を扶けて之に力を與へてやつた、信仰の厚い感心な人が、此度苦難に會ふなんか」と、頗る感慙に、ヨブを慰めるのであつた。併しヨブと議論を闘すにつれて態度が一變し「貴様は理由もないのに兄弟の物を押へて質とし、裸の者の衣服を剥ぎ取り、渴く者に水も與へず、餓る者に食物を施さぬではないか、此の罰當り奴が」とヨブを罵り、その言ふ處を「之れ何の眞理ぞや」と嘲笑するのである。

此の急變こそ、エリハズが統一せる思想を持たぬ證據である。何かのシヨツクに出會すると、忽ち考へが變つて了ふのである。今、之を推賞したものが、次の瞬間には之を貶すに至るのである。斯うした種類の人は世の中に多い。

ヨブはその友エリハズが掌を返すが如く、之に敵對するのを見て悲しんだ。吁、友も亦頼むに足らない。それは谷川の水だ。運に委せて附くかと思れば又

即ち人の熟睡する頃、我夜の異象によりて想ひ煩ひをりける時、身に恐懼をもよほして戰慄さ、骨節ことごとく振ふ。時に靈ありて我面の前を過ぎければ、我は身の毛よだちたり。その物立とまりしが、我はその状を、見わかつことをえざりき。唯一の物の象、わが目の前にあり。時に我しづかなる聲を聞けり。曰く人いかでか神より正しからんや。人いかでか造主より深からんや。彼はその僕をさへ頼みたまはず。其使者をも足らぬ者と見做したまふ。况んや土の家に住をりて塵を基とし蟬蟻のごとく亡ぶる者をや。是は朝より夕までの間に亡び、かへりみる者もなくしく永く失逝るその魂の緒、あに絶えざらんや。皆悟ること無くして死す。(第四章一三—二二節)

即ちその幻の啓示は、人間ほど頼み少なきはない。夫れはかけらうの如きものであるといふのであつた。

人間に對する絶對の不信用である。それは小乗佛教の教理と同一である。親鸞上人も之を言つた。今日も亦斯く考へる神祕論者が少くない。

彼等にとつて、人間は根本的惡である。従つて我等の日々の行動、道德的、科學的、藝術的の凡べての行動、否、その人格をも信用し難い。人は恰も大海

の泡沫の如くである。

併し斯く考へる事が既に泡沫の如きものではあるまいか。世の中を頼みなしとする人こそ、頼みなき者ではあるまいか。ヨブは斯うした人間の見方に對して明瞭に反對した。

勿論、そうした悲觀的な神祕的傾向は、多少の差こそあれ我等にも在る。災厄に會ふと、直ぐ夫れが頭を擡げて來る。傳道の書の劈頭にある「空の空、空の空なる哉。凡て空なり」とする事が、我等の心にも湧いて來る。

其處には新しき發見もなく、創作もなく、人間の進化もない。

#### 悪を逃避するな

併し我等は天に翻弄されてはならない。神の表現としての人間が、そう容易に破棄されては耐まらない。若し人間がそんなにつまらぬものだとしたら、夫れを作つた神も亦つまらぬものとせねばならない。

神のみを至上のものとして、人間を極めて卑しくつまらぬものと看做すのは未だ眞の信仰に味到せぬ者の言である。人間を萎縮して考へるのは、未だ眞の信仰ではない。

小乗佛教の惡の解決は、エリハズと同じ立場からする。即ち惡といふものは考へるから惡いのだ。何もないと考へれば善いのだとして、始めから惡を肯定しないのである。

災害は天災だが、それは相對的のものだ。そんなものは無だと思へば何んでもない。絶對の中に沒して了ふものだ。之を超越的に見れば惡は影の如く消失せるものだ。天災も何もない。神から見れば、終始同じ永遠の靜寂である。――斯う見るのが、小乗佛教の惡の見方である。

眼前に災厄を見乍ら、強いて眼を閉じて「そんなものはない。何もない」とする逃避的の見方である。

天災に直面し、自らを信じて勇敢に突進して行く心持は、此種の感情的宗教形式、逃避的の考へを持つ者にはない。

ヨブは相對の惱みを肯定し、天災に直面する勇氣の持主である。

近代人の中にも、悪を無から計算し、悪を逃避し、男らしく悪を身に引受ける事を避けて、たゞお題目のみを唱へ、悪に對する徹底的の抗争を敢てしない者が少くない。これでは悪の解決にはならない。

我等は悪は悪として引受け、又之を正視して、一步も逃避せぬ信念が必要である。

### ビルダテの勸善、懲惡説

ビルダテは常識的な男であつた。彼は歴史の上から悪を批判して居る。而もその歴史の見方たるや、頗る簡單である。即ち凡ての歴史が勸善懲惡の歴史だと考へるのである。之は眞の歴史の見方ではないが、素人にはサモ何か意義の

あるものゝ如く考へさせるものである。

父祖の究めし處を學べ

請ふ汝過にし代の人に問へ、彼らの父祖の尋究めしところを學べ。(第八章八節)

彼を以て言はしむれば、人間の經驗といふものは、個人としては極めて短いものであるが、それを延長した歴史といふものになれば、頗る經驗となるのである。故に、我等は凡てを此の歴史について聽く必要があるとするのである。歴史から見ると、凡ての災厄といふものは悪人に降るもので、善人の上に降注いでくるものではない——とビルダテは言ふのだ。

神は完全人を捨てず

それ神は完全人を棄たまはず、また惡き者の手を執りたまはず。(第八章二〇節)

神は完全人には災害を與へ給はないといふのである。彼は之を第八、十八、二十四章においても繰返し言つて居るのである。

彼は根本的に人間性の悪を主張し、神の前に値なき事を主唱した。

ビルダテの如き人物は、世間に屢々見る處である。或は世上の悪に對する俗論の標本であると言ひ得るかも知れない。

ギボンのローマ衰亡史を讀む人は、ギボンが、ローマの衰亡はローマ人の頹廢の結果だとせるに氣がつくであらう。即ち彼は衰亡の原因として七つ八つの事項を擧げてゐるが、それは要するにローマ人が道德的に、性慾的に糜爛し、頹廢せる事であつた。即ちタシタスの言へる如く、ローマを亡ぼしたものは敵ではなく、ローマ人自らであつた。ローマ人相互間に社會的信用なく、内部から自然に亡んで了つたのである。

此の結論からすれば、ローマの亡んだのは道德的の因果關係の如くに看取され、勸善懲惡となり易い。之は神祕論など違つて、さも尤もらしく聞える議論である。我等も兎もすれば此の考へに陥り易い。ローマを見よ、バビロンを

見よ！と言ひたくなるのである。

併しヨブは此議論にも服しなかつた。何となれば、此のビルダテの所論を以てすれば完全人は捨てられない譯であるのに、事實においては完全人が却つて苦難を受けて居るからである。

完全人にも災厄が降りかゝるのではないか。亡ぶ者は必ずしも悪人許りではないではないか——ヨブは斯う反問するのであつた。

勿論悪人も亡びる。

尾に従ひて彼を追ふ

怖しき事四方になりて彼を懼れしめ、其兄にしたがひて彼をおふ。(第十八章二節)

逃げても逃げても悪が追つかけて来る。此度の東京の震災を思はしむるものがある。

併し此度の大地震災について、夫れが何か東京人の犯した罪惡の報ひである如

く考へる事は、ビルダテの亞流を汲む者である。全く罪の無い兒童や、慈愛深い母の死が、仕うして罪障の報ひだと言へやう。それは餘りに殘酷な批評である。

然うだ。東京市民は決して悪人許してではない。完全人も居た。然るに厄災は彼等の上に一時に降つて來たのだ。

ヨブは自ら潔しと言つた。自ら正しと言明した。それなのに、神は何故怒を燃して我を敵と見給ふやと、神に抗議を申込んでゐる。ヨブの煩悶が其處にあつた。

神われを責む

わが友よ、汝等われを憐れ、神の手我を打てり、汝らなにとて神の如くして我を責め、我が肉にあくことなきや、望むらくは我言の書留められん事を、望むらくは我言書に記されんことを。望むらくは鐵の筆と鏝とをもて之を永く磐石に鏤つけなかんことを。あれ知る我を贖ふ者は活く、後の日彼がならず地の上に立ん。我がこの皮この身の朽はてん後、われ肉を離れて神を見ん。我みづか

ら彼を見たてまつらん。我目彼を見んに讒め者の如くならじ、我が心これを望みて焦る。なんぢら若しわれら如何に彼を責んかと云ひ、また事の根我れに在りと言ば、劍を懼れよ、憤怒は劍の罰をきたらす、斯汝ら遂に審判のあるを知らん。(第十九章二一—二九節)

ヨブの考へに比し、ビルダテの考への餘りに淺臺であつた事は、何人にも首肯し得る處である。即ち彼は悪と苦とを混同したのである。外部的の苦と内部的の悪とを混同したのである。我等はビルダテの妄に陥らぬやうに注意しなければならぬ。

内部的悪が、外部的苦に酬ひられるといふ事は誤りである。斷層が違ふのだ。東京の震災を東京人の惡に起因せしむる妄論を排斥せよ。

#### 不完全な人間の歴史

加之、ビルダテの議論は矛盾して居る。彼は人間それ自身をうじの如きものだとした。



然ば誰か神の前に正義かるべき。婦女の産し者いかでか清かるべき。爾も月も輝かず、星もその目には清らず、元んや蛆の如き人、虫の如き人の子をや。(第二十五章四節)

若し彼の此の言の如くだとすれば、人間には善人悪人の區別はない筈である。勸善懲惡もない筈である。

歴史といふものは、善惡關係で列べられて居るものではない。歴史は善と惡の關係で成立してはゐない。

内部から力の動いて來る歴史は、生命の歴史だ。それには必ずしも惡がひとつついては來ない。智の發生、美に對する憧憬もある。内部的本能の發生もある。その他其處には多くの無意識的の歴史がある。そこには、善惡を超越した記述で滿されてゐる。故に歴史を捕へて、人間の苦の羅列してあるものとして調べるのは、見當違ひも甚しと云はねばならない。

繰返して言ふ。歴史を見る時、勸善懲惡の眼鏡だけで見てはならぬ。今日の歴史論はもつと深く深いものである事を知らねばならぬ。

我等の歴史は僅か四千年の歴史に過ぎない。それで此の宇宙大の説明の出來やう筈がないではないか。

ポールゼンは「歴史に哲學なし」とさへ喝破して居るのだ。

意識せぬ歴史——人間成長の歴史を閑却して、僅か四千年の歴史を以て全部の歴史と思ふのは潜越である。

我等の歴史の大部分は飛んで了つて居る。我等の意識せぬ歴史は飛んでゐる微妙なる人間の風俗や習慣、嗜好の歴史はない。

我國では最近脂肪の消費量が増えて來た。日本の女の化粧が變つたからであらう。こうした事は極めて意味の深いものだ。併し歴史は之を顧みない。性に關する意識の變遷も意味の深い事だ。舊約の亂婚時代から、基督教的の

一夫、一婦に移るまでの記録は、歴史に飛んでゐるではないか。

四千年の記録はあつても、夫れは世界的の記録としては、迎ても不完全のものたるを免れない。大事な處は皆飛んで了つてゐる記録である。

成長の立場から見て、災厄が悪から來るものとは断じて言へない。悪人が亡びるといふ事は、悪だから亡ぶのではなく、悪自身に亡び易い性を具備するからである。

即ち悪とは、亡びる性質あるものを言ふのである。故に、悪人が亡び善人榮えるといふ事は、善惡の性自身の中にあると言はねばならない。従つて内部的な亡びる性を持つ悪と、外部的な災厄を結付けるのは、未だ靈の成長せぬ時の言分であつて、誤れるの甚しきものである。

ジー、デイ、エツチ、ウエルスが、その著作「世界文化史」に於て、その記述の範圍を人間の無意識方面にまで擴げて進化論的に記して居るのは興味ある事

實である。此のウエルスの文化史を見ても、現存せる人類が、凡べて善き人類のみでない事は明瞭である。

地理的、物理的災害と、心理的、精神的の惡を混同してはならない。此の混同こそ、ヨブをして大いなる煩悶をなさしめた所以である。

#### 断案を急ぐな助けよ

東京、横濱の災害が、彼地商人の墮落、貴族社會の腐敗の爲めなりとし之を當然の報償とする事は、飛んでもない誤謬である事を知らねばならない。

事實をうした批判をする事は人間の職分ではない。神のみの判断し給ふ處である。ヨブも、友人が此種人間の職分以上に出て、ヨブを批難するに對し。

わが友よ、汝等我を憐れ、我を憐れ、神の手我を擊てり、汝等は何とて神の如くして我を攻め、わが内に鑿く事なきや。(第十九章二一—二二節)

と言つて居る。

然うだ。我等は友人の苦難に直而する時、之を糺弾するよりも、先づ之を憐む事だ。ヨブの膿を拭ふてやる事だ。

人間の仕事は、互助であつて断案ではない。我等は人の苦難に面する時、之に對して断案を下す前に、先づ最善の努力をして苦難の排除に當らねばならない。断案はその後において下さるべきものである。

我等が、假に茲に社會的惡を持ち、友人の輕蔑、民族間のそねみの爲めに自殺するに至つたとし給へ。その場合その性格的の軋轢は果して決定的のものであつたかどうか、又は或る改造を遂げる自由意志が含まれてゐたかどうかに依つて惡の決定が自ら違ふ譯ではないか。

貧民窟に於ける人間の苦難といふものが、ドン底で救ふべからざる決定的のものであるとするならば、私の貧民同化事業も意味をなさない。併し私が尙且之に従ふ所以は、私の努力に依つて、假令一人でも救ふ事が出来、その靈から

苦惱を除く事が出来ると信づるからである。

凡べての断案は、內的に最善の努力をした後において、初めて下し得るものである。換言すれば、算術の商は、引き算をした後生れるもので、引き算せず

に商を出さうとするのは無茶である。  
徒らに宇宙惡を嘆いてはならぬ。先づ此の宇宙惡に對して最善の努力をしやう。爾かする事なく、只だ宇宙惡を嘆く者は、人間の責任を盡さぬものと言はねばならぬ。

私は言ふ。假令世界が凡て暗黒で、根本的に惡であらうとも、絶望しないと其處には少しでも世界の惡を拓く挺のある事を信づるからである。

天の岩戸が閉されても、尙手力命の指先を入れる事の出来る岩戸の隙間が残つて居る間我等は決して絶望してはならない。

我等が厭世になるか、樂天になるか、悲觀するか、樂觀するかは、一にかゝ

つて我等の内的態度にある。人間的の互助をなす事なくして徒らに悲観する事を止めよ。

人間としては、決して決定を急いではならぬ。他人の惡に對する判斷をするな。

⑥ 先づ同情せよ、そして相共に勵め。その後には於て始めて惡に對する分量を決定しやう。之れがヨブの考である。

### 教義的なるソバル

ソバルは智慧を尊重した。

### 智慧の秘密

智慧の秘密を汝に示してその知識の相倍するを顯したまはん事、を汝しれ、神は汝の罪よりも輕く汝を處置したまふなり。(第十一章六節)

そして彼はリアリズムの立場から、ヨブを善人でないとして當こすりを言つ

た。彼は冷き理性の持主であつた。

### 邪曲なる者亡はぶ

なんぢ知すや古昔より、地に人の置れしより以來、惡き人の勝誇は暫時にして、邪曲なる者の歡樂は時の間のみ。その高さ天に通しその首雲に及ぶとも、終に己の翼の如くに永く亡絶ゆべし。彼を見識る者は云はん、彼は何處にありやと。彼は夢の如く過りて復見るべからず、夜の幻のごとく追はらはれん。(第二十章四—八節)

即ち彼はエリハズの如き神秘論者でもなく、又、ビルダテの如き經驗派でもなかつたが、その結論は前二者と同じ處に達した。ヨブは惡んだから戒めを受けただのであるとするのである。

彼の理性は、自己の理窟に都合善く作られて居るのであつた。彼は獨斷的であつた。

彼は「惡人は此世に於て必ず亡ぶ」と斷定した。杓子定規的に獨斷した。然らば何人が惡人でないのだらうか。

一体自分の生活状態に合すやうに、始めから作られてゐるやうな理窟は、所謂純眞な靈に向つては何等の權威にも値ひしない。

今日の宗教上の學問といふものは、夫れが佛教にしり、基督教にしり、餘りにその教條學に囚はれ過ぎて居る。紙上に囚はれて、神それ自身が内部に働く處の生命の体験——それを打ちつけて外に働き出るのでない爲めに、災厄に對しても誤算許りしてゐるのだ。

我等が理性を持つ場合にしても、良心を離れて理性のない事を知らねばならない。カントの如きも『理性は當てにならない。寧ろ良心が神を教へる』と言つて居る。

我等の智、情、意は分離する。見よ。美人の前には尊い書物をも賣るではないか。我等の感情生活の爲めには、親をも度外視するではないか。我等の日常生活に於て、智、情、意が分離し過ぎる場合が少くない。同じ感情さへも統一

され難い事が屢々ある。

笑と怒が分離する。我等が曾我廼家五郎劇を見に行くのは笑を買ひに行くのだ。併し中村雁次郎劇を見に行くのは涙を買ひに行くのである。

之と同じやうに、氣分を買ひに教會へ來る者がある。殊に早朝祈禱會などは氣が暗々となつて恰かも何か大きな節穴に詰め木をしたやうな、或約束の果された爽々しさといふやうな氣分を味ふといつて悦ぶ基督者もある。人の死んだ時、神を立てると氣が濟むといふのと同儀である。

之等は分離した感情であつて、全生命から湧いた生命藝術ではない。

#### 一筋に信仰の道に進め

今日の教會、社寺、佛閣は氣持が善い。併しそれは外部に向いた感情に過ぎない。私共は夫れでは満足が出来ない。我等の求む處は、内の感情が一つになつて外に向ふやうになる事だ。即ち人間建築の宗教である。

若し感情の統一があつたら、佛教徒でも屹度十字架のイエヌを眞理とする筈である。

今日の神學にして、佛教々條にしても、凡て理性の翫弄物だ。感情に合す爲めに理性を持つて來たものに過ぎない。ゼームスの宗教哲學の如きも餘りに實用的である。それは内から湧いたのではなく勝手にとつてつけたものだ。我等は斯うした理性の翫弄に依つて凡てを判断する事を悲む。

ツパールの判断も夫れであつた。彼は灰の中に藻掻いて居るヨブを睥睨し乍ら、涙一つ拭ふてやらうとはせず「君は悪人だつたから災害を受けたんだ」とのみ言つてゐる。

そうした批判が何になる。まして苦難してゐる當人に取つてそれが何にならう。そうした場合、その人が何故災厄にかゝれるやなどの詮索は無用の業である。

考慮を要するのは此點である。

東京の罹災者に尙つて「お前は罰當りだよ」との手紙を出す暇があつたら先づヨブの患部に繃帶をしてやる事だ。

善惡の裁判は神の職分である。

誰が惡の起源を知らう。

私は過去二十年、惡の起源の研究をして居る。「苦痛と災厄」は私の研究題目である。

印度哲學にしる、希臘末斯の新プラトニ、ストイック哲學にしる、惡に對する哲學は凡て失敗である。それは成功する筈がないのだ。人間の歴史は、僅か四千年に過ぎず、心臓の電氣的作用を知つたのも極く最近の事であるのではないか。それがどうして、宇宙の惡を解決し得やうぞ。

苦痛に打克つ力は宗教だ。信仰だ。内から來る力だ。十字架にさへ打克つた

復活の人があるではないか。

内から打破つて行くのだ。そして凡ての悪を善にするのだ。  
新しき創作、新しき生命の廻轉だ。之を宗教と言はずして、果して何か宗教  
であらう。

「我は死も陰府も恐れず」とパウロは言つた。悪に打克つ工夫は之だ。宗教だ  
信仰だ。

我等はこの煩悶を考へず、只だ一面に、悪に打勝つ信仰の道に進まねばなら  
ない。基督に依つて打克つて行かねばならぬ。

## 第六章 ヨブに現れたる神

### 「なる神、靈なる神

ヨブに現れたる神は「一なる神」「全能なる神」「靈なる神」である。

### 神は一也

汝は言ふ、神何おか知しめさん、豈よく黒雲の中より審判するを得給はんや。(第二十二章一三節)  
われを胎内に造りし者また彼をも造り給ひしならずや、われらを腹の内に形造りたまひし者は唯  
一の者ならずや。(第三十一章十五節)

全能者、今請ふ獸に問へ、然は汝に教へん、天空の鳥に問へ、然は汝に語らん。地に言へ、然は  
汝に教へん、海の魚もまた述べん。誰か、この一切の者に依りて、エホバの手のこれを作りしなる  
を知らんや。一切の生物の生氣および一切の人の靈魂ともに彼の手の中にあり、耳に說話を辨へ  
ざらんや。その状あたかも口の食物を味ふがごとし。老いたる者の中には智慧あり。壽長者の中に  
は顯悟あり。智慧と權能は神に在り。智謀と顯悟も彼に屬す。視よ彼腹では再び建ること能はず。  
彼人を閉こむれば開き出すことを得ず。視よ彼水を止むれば則ち涸れ、水を出せば則ち地を滅す。  
權能と顯悟は彼に在り。惑はさるゝ者も、惑すものも、共に彼に屬す。彼は識士を裸體にして擡へ  
ゆき、審判人をして愚なる者とならしめ、王等の權威を解きて反つて之が腰に繩をかけ、祭司等を  
裸體にして擡へゆき、權力ある者を滅し、言爽なる者の言語を取除き、老いたる者の了知を奪ひ、  
候伯たる者どもに恥辱を蒙らせ、強き者の帯を解き、暗中より隠れたる事等を顯はし、死の陰を光  
明に出し、國々を大にしました之を滅し、國々を廣くし、また之を舊に歸し、地の民の長たる者等の

了知を奪ひ、これを踏なき荒野に吟行はしむ。彼らは光明なき暗にたどる。彼また彼らを酔る人のごとくよろめかしむ。(第十二章七—二五節)

嗚呼、われの言とこゝろを聴わくる者あらまほし。(我が花押、こゝに在り、願はくば全能者われに答へたまへ。)我を訴ふる者みづから訴訟狀を書け。(第三十一章三五節)

願よ、彼わが前を過たまふ。然るに我、これを見ず。彼す、みゆき賜ふ。然るに我之を曉す。彼奪ひ去賜ふ。誰か能之を阻まん。誰か之に汝何を爲やと言、ことを得爲ん。神其震怒を息賜はず。ラハアを助る者等之が下に屈む。然ば我争でか彼に回答をせじ。彼は我を審判く者なれば、我彼に哀きは大風をもて我を撃碎き、故なくして我に衆多の傷を負せ、我に息をつかしめず。苦き事をもて我身に充せ賜ふ、強き者の力量を言んか、視よ此にあり審判の事ならんか、誰か我を喚出すことを得爲ん。假令我義かるとも、我口われを惡しと爲ん。假令われ完全かるとも、尙われを非ありとせん我は全し。然れども我はわが心を知ず。我生命を賤む皆同一なり。故に我は言ふ。神完全者と惡者とを等しく滅したまふと。災禍の俄然に人を誅す如き事あれば、彼は辜なき者の苦難を笑ひ見たまふ。世は惡き者の手に交されてあり。彼またその裁判人の面を厭ひたまふ。若彼ならずば是誰の行

爲なるや。わが日は驛使よりも速く、徒に過ぎりて福祉を見ず、其はしること葦舟のごとく、物を攫まんとして飛びかける鷲の如し。たとひ我に愁を忘れ、面色を改めて笑ひ居らんと思ふとも、尙この諸々の苦痛のために戦慄くなり。我思ふに汝われを釋し放ちたまはざらん。我は罪ありとせらるゝなれば、何ぞ徒然に勞すべけんや。われ雪水をもて身を洗ひ、灰汁をもて手を潔むるとも、汝われを汚はしき穴の中に陥れたまはん。而して我衣も我を厭ふにいたらん。神は我のごとく人にあらざれば我かれに答ふべからず。我ら二箇して共に審判に臨むべからず。また我らの間には我ら二箇の上に手を置くべき仲保あらず。願くば彼その杖を我より取りはなし、その震怒をもて我を懼れしめたまはされ。然らば我言語て彼を畏れざらん。其は我みづから斯る者と思はざればなり。(第九章十一節以下)

### 嚴肅なる神

併しヨブに現はれし神の最大の特徴は「嚴肅なる神」である。夫れは殆んど『恐怖の的』の如くに書き現はされて居る。

神の尊嚴(恐しき神)

我若し罪を犯さば汝われを認めてわが罪を赦し給はじ、我若し行狀惡しからば禍あらん。假令わ



れ正しかるとも我頭を擧げじ、そは我は裏に馳充ち眼にわが患難を見ればなり、若し頭を擧げなば獅子の如く汝われを追打ち我が身の上に復た汝の奇しき力を現し給はん。(第十章一四——一六節)

即ち少し頭をもたげても直ぐ鞭を當て給ふところの嚴肅なる神、換言すれば寸惡をも赦し給はざる神を見たのである。神と人とが競争して、少しでも人が高騰した時、忽ち頭上に鐵拳を下し給ふといふ神を書き現はしてゐるのである。

甚しきに至つては、彼は神の威嚴に戰慄し、「汝の手を我より離し給へ、汝の威嚴をもて我を懼れしめ給はざれ」(第十三章二一——二二節)と神に哀訴嘆願して居る場合さへある。

又或時には「我彼の前に慄ふ。我考ふれば彼を懼る。神わが心を弱くならしめ全能者われをして懼れしめ給ふ」と五體を震はせ乍ら語つて居る處もある。

斯くの如く、ヨブは怖しき神を見た。之は愛の神と全く正反對である。

人が自然を征服して行くにつれて、自らの内部的力を信ずる事が漸次強くなつて行く爲めに、自然に對する恐怖の心も亦次第に薄らいで行くのは當然の順序である。そして此度は自然の恐怖と入替つて、自分自らに對する恐怖を抱くに至るものである。人は自ら仕體放體の事をなし得る爲め、自らを怖れるやうになるのである。今日の所謂「文明病患者」といふのも此類である。

ヨブの神に對する恐怖は、一面において自分といふ實在に對する恐怖である事を閉却してはならない。

彼は苦惱の中に置かれ、精神上の煩悶に苦み、疑惑に陥つた。それは今日の虛無主義者が持つ處の煩悶、疑惑に近いものである。そうなつて來ると、ヨブは神よりも寧ろ自分といふものが怖しくならざるを得ない。そして自らを怖れる事は、延いて又その怖しき自分を作つた神に對する恐怖になるのである。故に、若し自ら自身の疑惑、恐怖を一掃し得たとしたら、神に對する恐怖も亦一

掃する譯であつた。ヨブが神を怖れたといふのも、畢竟、彼自身の苦惱の結果に外ならない。彼の苦惱を他所にして怖しき神はないのだ。

神の姿をレンズを透して見るならば、そのレンズの屈折如何に依つて、對象たる神の姿がいろいろに見える筈である。夫れと同じやうに、自分自身の中に恐怖があるならば、宇宙も亦恐しきものとして心に映する譯である。

ヨブが恐しき神を見たといふ事は、即ち彼自らの中に恐怖の存在した事を物語るものでなければならぬ。故に見方に依つては、ヨブの煩悶は病的であるとも言ふ事が出来る。

ポードレルやマラルメ等の耽溺派の文學からすれば、宇宙は怖しきものに違ひない。何故なれば彼等自らが死を讚美し、虚無を讚美して居て、常に恐怖が彼等に付き纏ふて居るからである。

### 痺痺せる我等の靈

我等は、幸ひに平靜なる日常生活を送つて恐怖を持たないが、若し自らを附け纏ふ恐怖がありとすれば、屹度神の矢が心臟に突き射されたやうなもので、其處に心傷が生ずる。そしてその傷を通して神を見る時、神が傷のみを呪ふて居る如くに見えるであらう。

世間には自首病といふ精神病がある。その病者は屢々警察署に出頭して、罪を自首するのである。併し事實に於てそうした犯罪を行つて居るのではなく、嘗て犯した鳥渡した罪が心にこびりついてゐて、時候の變化などに會ふ時、耐まらなくなつて、犯しもせぬ罪を自首して出るのである。之れは上記の神を怖るゝのと同轍で、自身の中に恐怖を持つ結果に外ならない。

罪を犯した人は、屢々良心の苛責に耐え兼ねて卒倒する事がある。自分が自らを許さぬ爲めに、神も亦許し給はぬのである。神が許し給はぬと言ふよりも先づ自らが許さぬのである。

ヨブの苦悶は、夫れが肉體的の苦悶でなく、精神的の苦悶であるだけに、苦悶の程度は大であつた。ヨブが世界惡、社會惡に對して抗爭せんとし、彼の中に叛逆的精神の湧いて來た時、宇宙全體が彼の前に恐怖として見えたのである。此點も最も注意する必要がある。

我等は一面に於て麻痺せる靈を持つて居る。それで神の嚴肅も、神の愛も左程に感じないのだ。

汽車に乗つた小兒は車窓に映る景色の一つ一つに見入つて興をやつて居るが大人は豈關せず焉として景色に注意を拂はうともしない。つまり靈が慣れて麻痺して居るのである。我等は日の出、日の入の神秘にも最早驚異の眼を眩かぬと同じやうに神の愛、嚴肅、恐怖にも麻痺して了つて居るのだ。

然るにヨブの靈だけは麻痺して居なかつた。彼は妻に捨てられ、愛兒を喪ひ友に叛かれて、その靈は奮然として震ひ起きた。地震や地之の爲めに、今まで

隠れてゐた斷層が地上に露出するやうに、麻痺した靈に現實が現はれた。ヨブが神の尊嚴を見たのは此の意味である。

病的になつても困るが、麻痺した靈になつて了ふ事も考へものである。我等は神の愛を思ふと共に、神の嚴然たる姿をも見なければならぬ。

シヨーチ、フォックスは神の前に嚴肅なる態度を採る爲め、身震ひをした。世人はその流を亞ぐ者を「身振ひ信者」と命名して居るが、開祖フォックスは神の尊嚴に打たれて身を震はせたのに違ひない。

カルピンの如きもその神學の基礎を、神の尊嚴に置いた。我等は餘りに神に慥れて、良心が麻痺し神の尊嚴を忘れ、超越的勢力に自ら目隠しをして居る憾みがありはしないか。フォックスを模倣する必要はないが、カルピンやヨブに學ぶ處があつて然るべしと思ふ。

宗教を玩弄してはならない。宗教を飯事や、お祭騒にしてはならない。ク

リズムマスは面白いから盛大にやらうといふやうな気分、宗教に這入つてはならない。神の尊嚴といふ事を忘れては、宗教の價値はない。氣分許りで神を信仰するのは誤つて居る。我等は命がけで、行動の神を信じなければならぬ。其處に嚴肅なる神がある。

### 戦ひの神

ヨブは神の前に戦慄した。その神が戦の神であつた事は奥深き事である。神はヨブに對して「われを打破りて、破れに破れを加へ、勇士の如く我に奔せかゝり給ふ」(第一六章一四節)處の神であつた。

又エホバが大風の中よりヨブに宣ふた言葉の中には「汝雪の庫に入りしや、雹の庫を見しや」(第三八章二二節)といふ一節がある。即ち神は人間の叛逆に備ふる爲め雪や雹の銃丸を天上の倉に貯藏してあるといふのである。そして一旦干戈を交ゆるに至れば、神はその倉庫を開いて、雪雹を機關銃の如くに人間

輩の上に放ち給ふといふのである。

神を演劇的に見た點は、道がにヨブならではと思はれる。其處にヨブの詩人たる面目が躍如として居るのを見る。

「神は戦へり」——之はイエラエルの見方である。つまり惡に對する抗爭の意味である。神が常に惡に向つて奮闘しつゝある事を表した言葉である。

パウロをして言はしむれば萬物が悶えて居る。「萬の受造者は今に至るまで共に歎き共に苦しむ事あるを我等は知る」(ローマ書第八章二二節)とあるのが夫れである。

基督者にも深き嘆きがある。煩悶のない處に基督者はない。此意味を擴充して、パウロは宇宙萬物皆此嘆き無きはなしと言つたのだ。そして神は此嘆きを如何に見給ふかと言ふに「聖靈も亦われ等の弱きを助く。我等は祈るべきところを知らざれども聖靈自ら言ひ難きの嘆きをもて我等の爲めに祈りぬ」(ローマ

書第八章二六節)とある如く、神も亦自ら言ひ難き嘆きを以て、我等の爲めに祈の媒合をしてくれられるといふのである。

ヨブは煩悶の神、奮闘の神を見たが、之はパウロの見た「嘆きをもて我等の爲めに祈る」神と大分接近した處がある。無論ヨブの考へはポーロほど進歩しては居ないとしても、戦の神を見た點は餘ほど進んでゐるものと言はねばならない。

我等が社會運動の渦中にある時、おのづから其處に戦の神を考へる。正義の爲めに戦ふ神を考へる。ヨブの戦の神にも、此意味が含まれて居た事は勿論である。

パウロは「我等の戦ひは空を打つ肉の戦にあらず、精神の戦ひである」と言つてゐるがヨブの戦の神も亦、此の精神の戦を戦ふ神であつた事は言ふまでもない。

### 救さざる神

ヨブが煩悶の裏に現れた神の姿は先づ第一に救さざる神であつた。之は舊約の煩悶であつて新約の煩悶ではない。又ヨブ記にあつても最初のヨブの煩悶であつて、終末に於ては解決されて、雲煙霧消した煩悶である。

有島武郎氏の嘆きは此の「救されぬ」といふ事にあつた。メーテルリンクの「鐵の門」では運命の扉は閉ざされた儘で開く時がない。夫れは救されざる門である。解放さるゝ事のない罪の扉を我等が持つといふのである。

社會は救してはくれない。其處で遂に死の門を潜るのである。有島氏が「私は戦へる丈け戦つた」と記したのは、生命の一本道を歩く人の嘆きである。ヨブも亦此事を嘆き悶へたのであつた。其處に救さざる神の姿があつた。

### 救さざる神

我は罪ありとせらるゝなれば、何ぞ能然に勞すべけんや。(第九章二九節)

我もし罪を犯さば汝われをみとめてわが罪を赦したまはじ。(第十章四節)

水の潤霜にあへば、即ち芽をふき枝を出て若樹と異らず。されど人は死れば消うす、人氣絶なば何處に在らんや。水は海に満き、河は潤てかはく。是のごとく人も寢臥してまた興きず、天の盡るまで目覺めず睡眠を醒さざるなり。(第十四章九—一二節)

植物には再生があるが、人間には若返り法がない。行詰つて了つては最早浮ぶ瀬がない。神も赦してはくれぬ。——之が煩悶時代のヨブの煩悶であつたが彼が此の煩悶を續けて行く裡に、神の救ひの加らざるべからざる信仰に到達するに至つたのである。ヨブ記の結末が夫れである。

或人は絶望して、神も人も共に許さぬとする。又或人は罪は赦されぬとする併し之は舊約時代の煩悶である。罪の贖ひを知らぬ前の煩悶である。

#### 暴虐と絶望の神

加藤一夫氏の詩に「残酷の讚美」といふのがある。凡べての残酷を讚美したものである。ヨブは残酷を讚美しなかつたが、神を目して暴虐なりとした。

#### 暴虐の神

なんぢ虐遇を爲し、汝の手の作を打棄て、悪き者の謀計を照すことを善としたまふや。(第十章三節)

もし頭を擧げなば獅子のごとくに、汝われを追打ち、我身の上に復なんぢの奇しき能力をあらはしたまはん。(第十章一六節)

神われを虐げ、その網羅をもて我を包みたまへりと知るべし。(第十九章六節)

斯くの如く神を目して残酷なりと記したのは聖書中にもヨブ記の外にはない之といふのも、ヨブ記が靈の成熟した著者に依つて記されたからである。

併し神を暴虐なりとはしても、ヨブは決してその神を捨てなかつた。煩悶を越えて尙信仰を支持してゐたヨブは偉大である。

それ許りではない。彼は神を絶望の神なりとさへ言つた。そしてそう言ひ乍らも、彼はその絶望を越えて、神に絶る意志を持つてゐた。

#### 絶望の神

水は石を墮ち、溪は地の塵を押流す。汝は人の望を絶ちたまふ。(第十四章一九節)

今日世界に於て最も苦める國民は印度人である。印度ではコレラの爲めに毎年何萬人となく仆れる。猛獸に噛み殺される者も多く、印度政廳は豹及蛇狩の爲めに何百萬圓といふ金を費してゐるといふ有様である。又飢饉が屢々襲來し最近廿五年間に數百萬人の人が餓死したとさへ言はれて居る。

斯うした自然の殘虐の鞭の下にある印度では、最初こそ愛の神が信仰されてゐたが、何時か夫れも消え、釋迦の思想も、ブラマの恵みの神も印度人の心を捕へる事が出來ずに、最近までは殘酷から免れん爲めの偶像的信仰のみが残された。

印度人の考へに依ると、斯うした惡疫、飢饉等の災厄は、惡の神の呪ひから來て居る。故に此の惡の神に人身供養をし、夫れに依つて呪ひから免れるより外に道はないといふのであつた。

即ち神の本質が惡であるから、之に餌を與へて自ら安全たらんとするのである。此の惡の神をシバの神(Siva)と言ふ。本尊は鬼であつて、その形相を見るに、唇は三角形をなし、目は三つあつて、頭には多くの鬚を繋ぎ、口に生首を咬へ、足に死骸を踏まへた物凄しい姿は、世に又と之れほどの殘酷な表現があらうかと思はれる許りである。

此の惡神は、最近基督教が印度に這入つてブラマ教と合體し、愛に依る解放運動——所謂ブラマナーシの起る前まで、全印度民衆の信仰の的となつてゐたのである。

夫れは殘酷の神であつたのだ。夫れは愛などの微塵もない、呪ひの神であつた。そして其處には、惡魔の呪ひをなだめる爲めの祈りと供へしかなかつたのである。猛獸と、疫病と、印度特有の階級闘争(印度には四つの階級があつてその階級差別は熾烈を極めた)に悩まされた印度人が、彼等の全體が殘酷の上

にのつて居るものゝ如くに考へたのも無理のない事である。

併しそれはそう見た彼等のレンズの誤りで、決して彼等が事實、残酷の上に  
乗つて居るのではなかつた。即ちそれが乗つてゐるところのレンズの焦點が結  
ばれない結果であつた。亂視の結果であつた。言ひ換ふれば、彼等が眞の神を  
持たない結果であつた。

### 先づ世界の暴虐を除かう

バクーニンは『神は暴虐者だ』と言つた。又露西亞のクレムリン宮殿前には  
『宗教は阿片なり』と記してあるといふ。果してそうだらうか。

今日の基督者の多くは現實の社會惡、宇宙惡を見乍ら、自ら夫れを見ざらん  
が爲めに目隠しをして『惡はない』と言つてゐる。斯くの如んば、宗教は阿片  
なりと言はれても、敢て辯解の辭はない譯である。

社會主義者は言ふ。『宗教は魔睡劑である。その魔睡劑を取りのけるのが社會

主義である』と。又言ふ。『宇宙は暴虐だ。暴に酬ゆるに暴を以てせよ。敵を仆  
す前に先づ神に爆彈を投せよ』と。

ヨブにも斯うした氣持があつた。ヨブは正しい人間であつた。夫れなのに彼  
は彼の凡べての物を失つた。彼が神を目して残酷だとしたのも當然の事であ  
る。

之を見たヨブの友は彼に忠告した。併しその友の言ふ處は魔睡的であつた。  
ヨブは夫れに對して『夫れは間違つてる』と跳ね退けて『俺は正しいのだ。俺  
は酬ひを受けるやうな悪い事はして居ない』と言ひ切るのであつた。

今日労働階級が貧乏して居る事が、彼等の怠惰から出發してゐるのだつたら  
その貧乏は當然の事として放任して置いて差支へない。併し反對に労働階級が  
正しくして勤勉であるなら捨て置く譯には行かない。彼等の貧乏は全く有り得  
べからざる事であつて、彼等が社會の暴虐に反抗し、支配階級の宗教を呪ふの



も之亦當然の事と言はなければならぬ。

バクーニン等の煩悶と、今人の煩悶には共通點があると言はねばならぬ。そして之等の煩悶が又ヨブの煩悶であつた事を思ふ。

然らば此の暴虐なる神は、如何にして之を除くべきか。それは先づ世界の殘虐を取除く運動をしなければならぬといふ事に歸着する。印度の死亡率を減ずる運動を開始せよ。社會を改造する運動を起せ。

貧民窟で毎日お葬式が出るやうになると、悪除けの御祓ひが各所で行れる。

夫れを迷信と云つて無碍に斥ける譯には行かない。その偶像教を斥ける爲めには、先づ貧民窟の死亡率の低下に努力しなければならぬ。

印度のシバ教を斥ける爲めには、宣傳だけでは効果がない。先づ印度の死亡率の低下に努め、そして愛の神を呪ひの神の代りに打樹てねばならぬ。

ロシアの大僧正チヨン(Tikon)は教會の裝飾に寶石を飾めたが、ボルシエビ

キーは彼に對し寶石を賣つて飢饉救済に義捐すべき事を勧めた。然るに彼は教會の尊嚴を毀けるからといつて之を斥けた。信徒は之を聞いて猛然立つて彼に反對し、遂に彼を捕へて牢に投じて了つた。全露教會總會も亦彼を免職させ、共產主義の大僧正を聘して之に代らしめ、寶石は直ちに賣拂つて飢饉民を救ふ資金にしたと言ふ。

チヨンは目に見える寶石の教會をのみ見て、目に見えぬ寶石の教會を見なかつた。さればこそ宗教は阿片だと罵られるのだ。教會に寶石を飾る事が宗教ではない。之を壁から取つて窮民に與へる處に眞の宗教がある。

我等はバクーニンやクロボトキンの反宗教思想に對し理論の上で争はうと思はない。我等は行動に於て彼等に挑戦しやう。我等の宗教は理窟ではない。行動である。表現の伴はぬ宗教は我等の宗教ではない。

ヨブの今一つの煩悶は、神が彼に直接の交渉を持つ事を拒み、彼の前を過ぎ去つて、その祈にも答へてくれぬ事であつた。

絶望の神

我にむかひて震怒を燃し、我を敵の一人と見たまへり。(第十九章一節)

即ち超越の神が、有限の靈に一瞥だに與へ給はず、さつさと過ぎ去り給ふ——と言ふのである。

神は餘りに超越的だ。高踏的だ。此の悩みを持つ我れに交渉のない神だ。あゝ絶望の神だ。——こういつてヨブは嗟嘆して居るのである。

汝答へ給はず

われ汝にむかひて呼ばるに、汝答へたまはず。我立をるに、汝只われをながめ居たまふ。(第三十章二〇節)

絶望だ。いくら祈つても答へてくれぬ神だ。俺はどこに神を求めやう——ヨブは然ういつて惱んだ。

併し彼は「神は残酷だ。絶望だ」と言ひ乍らも尙神を讚美する事を忘れない若し神が呼び給ふなら、東西南北何處へなりと行かうものを、けれど、わが求むる神は何處にもゐまさぬ——とヨブは悲しむのだつた。

神よいづこに

ヨブ答へて曰く、我は今日にても尙つぶやきて服せず、わが禍災はわが嘆息よりも重し。ねがはくば神をたづねて何處にか遇まつるを知り、其御座に参りいたらんことを。我この愁訴をその御前に陳べ、口を極めて辯論はん。我その我に答へたまふ言を知り、また其われに言たまふ所を了らんかれ大なる能をもて我と争ひたまはんや。反つて我を眷みたまふべし。彼處にては、正義人かれと辯争そふことを得。斯せば我をさばく者の手を永く免かるべし。しかるに我東に往くも彼いまます。西に往くも亦見たてまつらず。北に工作きたまへども遇まつらず。南に隠れ居たまへば望むべからず。わが平生の道は彼知たまふ。彼われを試みたまはゞ我は金のごとくして出きたらん。わが足は彼の步履に堅く隨がへり。我はかれの道を守りて離れざりき。(第二十三章一——二節)

ヨブは神の暴虐を云爲しつゝも尙神を求めた。

けれども神を外に求める事は徒勞である。外許しを見て内を顧みない唯我主

義者は、いくら神を捜しても、永久に神の姿を發見せぬであらう。

ロシアの小説家は、鐵砲をさへ偶像的に禮拜する虛無主義者のある事を小説に書いてゐる。

又佛蘭西革命の際、農民は日頃教會の僧侶が、毫も農民の利害休戚を顧みなかつた恨みと、モウ一つには寺領の農地を奪還するために、先づ教會を打壊した。そして神を呪つた。そのために疑惑思想が革命後の佛蘭西を襲ふたと言はれてゐる。

併し神は偶像ではない。外に神は求められない。農民の打壊したのは教會の建物と、愚かな僧侶とだけで、眞の神は壊されたのではなかつた。

#### 内側よりの教會改造

日本には未だ眞の教會はない。建物はあつても夫れは教會とは言へない。之から作るのだ。その爲めに我等は新しき元氣を以て神の本質を極めて居るのだ

我等が眞の神の道考へねば、誰が夫れを考へてくれるといふのだ。

併し既存の教會を幣履の如く捨てる事はならぬ。外から壊すのでなく、内側からやる事だ。畑たい牧師は、内側から燻り出す事だ。内側から膨れ出す事だ。我等はパンだねの心持がなければならぬ。

イエスは己れを中心にするなど教へた。我等は父なる神を忘れずに、宗派も捨てず、古い教會にゐて内側から改造して行く事だ。

コントは宗教的感情は必要だからと言つて人道を崇拜する事を主張し、眞理の禮拜を提唱した。之をバビウスと云ふ人が「クラルテ」といふ小説に書いてゐるが、彼は神を否定し、眞理のみを考へた。

小説の筋は、或工場の事務員が戀人と白日の夢を貪つてゐる時、遽かに戦争が始まり、戀人を殘して戦場に出たが、傷いて病床に臥する事となつた。彼はその病床で來るべき時代の事を考へて居ると、幻の如く基督が現れて「教會を

建てるな、目に見える教會を建てるな」と忠告したといふのである。

つまりバビウスに言はしむれば、神は人間が建てたものである。故に夫れは亡びる。只だ眞理だけは永遠に残るといふのである。併し之れは誤りである。何となれば、眞理と神とは別箇のものではなく、眞理の中に神が居給ふものだからである。

尤も、當時の宗教を考へると、バビウスの言分が全然無理とは言へない。何故なれば當時の教會の神は、佛國民を救はなかつたからである。眞理丈けが彼等を救つたからである。此處に於てか、彼等は「神なんかは向ふを向いてゐる。只だ眞理だけが出て来い」とした。それは無理からぬ事である。その意味でクララ運動は當然の運動だとも言へる。

ヨブも亦一時、神を絶望のものと考へた。併し彼はそれにも拘らずその絶望煩悶の中に尙神を求めて進んだ事は吾等の大に學ぶべき點である。之れ蓋し曰

フの絶對の信仰の結果である。

## 第七章 ヨブの信仰と祈

### 絶對の信仰

ヨブは絶望の神、暴虐の神と言ひ乍らも、終始神を捨てず、神の本質を疑はなかつたのは、全く彼れの絶對の信仰の賜物である。

ヨブは「彼れ我を殺すとも我彼に依り頼まん」(第一三章一五節)と言つてゐる。即ち打ちかけて行く、神に絶對の信を置いたのであつた。

多くの人はかうした徹底した信仰を持ち得ない。此處がヨブの偉大なところである。

斯うした絶對の信仰を持つたヨブは、折り重なる不幸に際しても、その歸結を知つてゐた。彼は「神より福を受く、災ひをも受けざらんや」(第二章一〇

節)と言ひ又、「エホバ支へエホバ取り給ふ」(第一章二十一節)と言つて、神が災厄を降し給ふ事に懷疑を持たなかつた。何といふ強い信仰だらう。

加之、ヨブは生温き苦痛よりも、烈しき苦痛を悦んだ。そして神に向つて涙を注ぐのであつた。愈々出で、愈々強き信仰ではないか。

苦の中にあつて喜ばん

然るとも我は尙みづから慰むる所あり。烈しき苦痛の中にありて喜ばん、我は聖者の言にもどりしことなければなり。(第六章一〇節)

神に向て涙を注ぐ

わが朋友は我を嘲りれども我目は神にむかひて涙を注ぐ。(第十六章二〇節)

斯くてヨブはいじめられ、いじめつけられた末、漸次に光明を發見して來た壓迫の中に希望の光を見出したのである。行きづまりから道を開くを得たのである。夫れが仲保者への信仰であつた。

仲保者への信仰

しかる時もし彼と共に一箇の使者あり、千の中の一箇にして仲保となり正しき道を人に示さば神かれを憫みて言給はん、彼を救ひて墓にくだる事なからしめよ。(第三十三章二三節)

神は我の如く人にあらざれば我かれに答ふからず。我ら二箇して共に審判に臨むべからず。(第九章三二節)

即ちヨブは苦惱の中から、忽然として神と人との間にモウ一つの實在がある事を發見したのである。言ふまでもなく、絶望のヨブに「人間の姿としての贖罪者」が意識されて來たのである。

眞理を還元する完全人の味方が一人殖えたのである。

植物には再生あり、然れども人に再生なしと考へてゐたものが、忽ち再生の希望が湧出て來たのである。

更改の希望、蘇生の希望、更生の希望に到達して、沈黙した苦悶が、遂に信仰に這入つた。

此の入信は全くヨブの煩悶、疑惑の賜物である。

然うだ。疑惑は信仰の父だ。

煩悶せよ。疑惑せよ。煩悶を通じてヨリ大なる信仰が来る。

鈍れる神経に来る神でなく、苦惱を通じて来る神、曲折して得た神を見よ。

ヨブは斯くて神の秘鑰を握つた。神から来た人の姿を見た時、基督を明かに想像し得るに至つた。

斯うした言葉が肉體になつて現れるといふ事は、超越的思想では考へられぬ。

#### 仲保者への信仰

ヨブは人間の慰みを捨て、神から来た助け人を幻の如くに見た。ヨブは新約に近づいたのである。受難者として完全人の姿として。

ヨブはイザヤ五十三章の受難者と同じ體驗を経たのである。ヨブ記の書かれたのは、多分イスラエル民族の最も成熟した時代即ち第二イザヤの時代と同じ時

代であつたらうと言はれるのは之が爲めである。

苦惱を神から與へられた人が、仲保者になるのだ。

神から来る第三者が、自分の苦惱を引受けてくれると思ふと同時に、その第三者が自分である如く考へるやうになるのだ。

己が、人の爲めに、又神の爲めに、苦難を受けさされるのだ。そして己の苦難は神への供へである。——こうした考へで受難するのである。

ヨブの煩悶は正しかつた。

ヨブは、此の誤れる三人の友と神の間に立つた、「受難者ヨブ」が贖罪して居るのだ。苦痛を通じてヨブが贖罪する事は、正に來るべきメシヤの姿である。

併し基督一人を受難者とし、ヨブ一人を仲保人としてはならない。我等も亦受難者とならねばならぬ。仲保者にならねばならない。

受難とは表面的な、わかつてわからの第三者の爲めに苦痛を受ける事であ

る。

神の計畫の一部の受難者として前進せよ。ヨブが夫れだ。

ヨブは煩悶しつゝも悲しみつゝも、尙且受難者として成し遂げた。

我等をしてヨブの道を辿らしめよ。

我等をして十字架を負はしめよ。

### ヨブの祈

ヨブの祈の特徴は大膽で、率直で、友人に對する話のやうである。儀式張つたところなく、凡べてを打明けて居る。神が判らぬ時には明瞭に神が判りませぬと祈り、少しも隠すところがない。其處にヨブの祈の大膽さ、率直さがある。

舊約の人物には、此種の祈りをする人があつた。エレミヤが然うであつた。

彼は早魃で幾日も〜雨の降らぬのを見て、神に向ひ「此上早魃がつゞいたら

神よ、あなたの恥辱ですよ」と祈つた。又或時は「神よ、冗談じやありませんよ。あなたは眠つていらつしやつしやるのですか」と反問してゐる場合さへある。

ヨブの祈りも亦然うである。彼は夢を驚す神を攻め、又神は我に新手に新手を加へて苦しめ給ふかと詰問して居る。

夢をもて驚しめ給ふ神

汝夢をもて我を驚かし、異象をもて我を懼れしめたまふ。是をもて我心は息氣の閉んことを願ひ我この骨よりも死を冀がふ。われ生命を厭ふ、我は永く生ることを願はず、我を捨おきたまへ、我日は氣のごきなり。人を如何なる者として汝これを大にし、之を心に留め、朝ごとに看そなはし、時わかす之を試みたまふや。何時まで汝、われに目を離さず、我が津を咽む間も我を捨おきたまはざるや。人を鑿みたまふ者よ我罪を犯したりとて汝に何をか爲さん、何ぞ我を汝の的となして我にこの身を厭はしめたまふや。汝なんぞ我の愆を赦さず我罪を除きたまはざるや。我いま土の中に睡らん、汝我を尋れたまふとも我は在ざるべし。(第七章一四—二二節)

新手に新手を加へて苦しめ給ふ神

汝はしばし、置する者を入かへて我を改め、我にむかひて汝の震怒を増し、新手に薪手を加へて我を攻めたまふ。何とて汝われを胎より出したまひしや、然らずば我は氣絶え目に見らるゝこと無く、曾つて有ざりし如くならん。即ち我は胎より墓に持ゆかれん。わか日は幾時もなきに非らずや。願はくば彼姑らく息て我を離れ我をして安んぜしめん事を。我往きて復返ることなきその先に斯あらしめよ、我は暗き地死の蔭の地に往かん。この地暗くして晦冥に等しく死の蔭にして區分なし、彼處にては光明も暗黒のごとし。(第十章一七一—二二節)

又或時には神は顔を隠し給ふかとなじり、我祈るとも汝答へ給はずとて神を罵つてゐる。

顔を隠し給ふ神

唯われに二つの事をなしたまはざれば然は我なんぢの面をさけて隠れじ。なんぢの手を我より離したまへ、汝の威嚴をもて我を懼れしめたまはざれ。而して汝われを召たまへ、我こたへん、又われにも言はしめて汝われに答へたまへ。我の怒われの罪いくばくなるや。なんぢは吹き廻さるゝ木の葉を成し、干あがりたる翹殻を追ひたまふや。汝は我につきて苦き事等を書し、我をして我幼稚時の罪を身に負はしめ、わが足を足絨にはめ、我すべての道を伺ひ我足の周圍に境界をつけたまふ。我は腐れたる者の如くに朽ちゆきむしに食るゝ衣服に等し。(第十三章二〇—二八節)

永久の友の要求

望らくば鐵の筆と鉛とをもて之を永く磐石りえにつけおかんことを。われ知る我を讀ふ者は活く、後の日に彼かならず地のの上に立たん。わがこの皮この身の朽はてん後われ肉を離れて神を見ん。我みづから彼を見たてまつらん。我目かれを見んに讒め者のごとくならじ、我が心これを望みて焦るなんぢら若われら如何にかれを攻めんかと言ひ、また事の根われに在りと言はゞ、劍を懼れよ、怒は劍の鞘をきたらず、斯なんぢら遂に審判のあるを知ん。(第十九章二四—二九節)

我神を尋ねて何處にか會ひ奉らん

ヨアコタへて曰く我は今日にても尙つぶやきて服せず、わが禍災はわが嘆息よりも重し。れがはくば神をたづねて何處にか遇ひまつるを知り、其の御寶座に参いたらん事を、我この愁訴をその御前に陳べ口を極めて辯論はん。我その我に答へたまふ言を知り、また其われに言ひたまふ所を了らん。かれ大なる能をもて我と争ひたをばんや、然らじ反つて我を眷みたまふべし。彼處にては正義人がれと争ふこと得。斯せば我をさばく者の手を永く免かるべし。しかるに我東に往くも彼在さず、西に往くも見たてまへらず、北に工作きたまへども遇ひまつらす、南に隠れ居たまへば望むべからず。わが平生の道は彼知たまふ。彼われを試みたまはば、我金のごとくして出てきたらん。わが足は彼の步履に堅く隨へり。我はかれの道を守りて離れざりき。我はかれの唇の命令に違はず我が法



よりも彼の口の言語を重ぜり。(第二十三章一—二節)

假令我彼を呼て彼我に答へ給ふとも我が言を聞き入れ賜しとは信ぜざるなり、彼は大風をもて我を打ち碎き故なくして我に衆多の傷を負せ、我に息をつかしめず、苦き事をもて我身に充せ賜ふ。

我祈るとも答へ給はず

(第九章一六—一八節)

われ汝にむかひて呼ばるに汝答へたまはず。我立をるに汝只我をながめ居たまふ。なんぢは我にむかひて無情なりたまひ、御手の能力をもて我を攻撃たまふ。なんぢ我を擧げ風の上に乗せて貢去しめ、大風の音とともに消亡しめたまふ。われ知る汝はわれを死に歸らしめ、一切の生物の終に集まる家に歸らしめたまはん。かれら必ず荒煙にもかひて手を舒たまふ事あらじ。假令人滅亡に陥いるとも是等の事のために號呼ぶことをせん。苦しみて日を送る者のために我哭さりしや、貧しき者のために我心うれへざりしや。われ吉事を望みしに凶事きたり、光明を待しに黑暗きたれり。わが腸沸かへりて安からず、患難の日われに追及ぬ。われは日の光を蒙らずして哀しみつゝ歩き、公會の中に立て助を呼もとむ。われは山犬の兄弟となり、駝鳥の友となれり。我皮は黒くなりて割落ちわが骨は熱によりて焚げ、わが琴は哀の音となり、我笛は哭の聲となれり。(第三十章二〇—三一節)

### 祈を現實化せよ

斯うしたヨブの祈を見て、我等も祈を型から脱して、モツと現實化しなければならぬ事を教へられる。夫れは決して六ヶしい事ではない。祈の現實化とは自由に、只だその儘を直接に神に物語る事である。

イエスの祈も、豫言者の祈も、共に自由な祈りであつた。それは極めて短い自由な祈りである。主の祈を見よ。含蓄する處は深いが、而も言葉少なで、そして自由な祈り方ではないか。

我等は餘りに詩篇の感化を受け過ぎてゐる。換言せば型に倣り過ぎて居る。我等は此の型から脱してヨブのやうに、エレミヤのやうに、大膽に、率直に祈らねばならない。それでなければ、宗教も信仰も人間の胸にはメスの如く鋭く來ないであらう。

神を父と呼ぶその心地で祈る事だ。それでなければ我等はイエスの友にはな

れない。

ヨブは友達の前こゝにに居乍ら、一人神ひとがみにもものを言つて居る。傍若無人はうじやくぶじんの處に、祈いのちの人としてのヨブの面目かみもくがある。

米國べいこくの説教家ビリー、サンデーは話はなしと祈いのちとの區別くわつがつかない。

禮拜らいはいと祈いのちりとを別べつにし、説教せききやうと禮拜らいはいを區別くわつするのは誤あやまりだ。我等われらは牧師ぼくしの話はなしを聞きつゝ、祈いのちりを聞かねばならない。

祈いのちりはモット通俗つうせき化する必要がある。テクニク許ゆるりの型がたにはまつたぎごちない祈いのちりは、眞まことの祈いのちりではない。

オトガスタンの懺悔ざんげ録ろくは、全部祈いのちになつて居る。祈いのちりが日記にっぎになつてゐる。だからどこまでが祈いのちりで、どこからが日記にっぎだかの區別くわつがつかない。そうした境きやう地ちになる事は尊たうとんい事ことである。

ヨブは全部神かみに溶け込んで居た。だから友の言語げんごと、神との對話たうごが同時どうじに重

るのだ。

パウロも議論ぎろん半はんで祈いのちりになつて居る。ローマ書第一章しよほあには、「彼等かれらは神の眞まことを易やすて偽いつはりとなし、造物主じゆつりやうしゆよりも受造物じゆつりやうぶつを崇奉あがまりて之これに事ことふ、神は永遠えいゑん頌美じゆんべいべきまの也なりアーメン。」とあつて、議論ぎろん中にアーメンになつて居る。

我等われらの祈いのちりも亦またヨブの如ごとく、パウロの如ごとく神かみに溶け込むまでに行いかなければならない。

## 第八章 ヨブ記に現れたる詩

### 雄大なる自然の詩

ヨブ記の著者ちやくしやはヨブをして美うたしき詩うたを唄うたはしめて居る。之これは綺麗きれいなオペラだ。大きなリラを持ち、弾ひじつゝ唄うたふべきである。

詩篇しへんはセロの伴奏はんそうで獨唱どくがうするが善よい。ヨブ記はリラの伴奏はんそうで合唱がうがうすべきであ

る。

然うだ。ヨブは靈の成熟した人物が書いたものに違ひない。言葉が凡て珠玉のやうに光つて居る。そしてなめらかだ。その自然の見方の如き、今人と雖も比及し難い。

先づ創造せられたる自然の記述を見よ。

創造せられたる自然

彼山を移したまふに山しらす。彼震怒をもて之を翻倒したまふ。彼地を震ひてその所を離れしめたまへばその柱ゆるぐ。日に命じ給へば日いです。又星辰を封じたまふ。唯かれ洞天を張り、海の濤を履きたまふ。また北斗參宿昂宿および南方の密室を造りたまふ。大なる事を行なひたまふ事測られず奇しき業を爲したまふこと數しれず。視よ彼わが前を過ぎたまふ、然るに我これを見ず。彼す、みゆき賜ふ、然るに我之を曉らす。彼奪ひ去賜ふ、誰か能之を阻まん。誰か之に汝何を爲やと言ふことを得ん。神其震怒を息賜はず、ラハブを助る者等之が下に屈む。然ば我争か彼に回答をなすことを得ん、争でわれ言を選びて彼と論らふ事を得んや。假令我義かるとも彼に回答をせじ、彼は我を審判ん者なれば我彼に哀き求ん。(第九章五——一五節)

「山動く」とあるからとて驚いてはならない。西藏では山が三哩動いたといふし、四川省でも大地震の爲め、山が十哩移つたと言はれて居る。地殻の波動から山は動くのだ。「その柱」も大膽な表現ではないか。地球が柱に依つて支へられて居るといふのだ。

天地創造の詩は曩にも引照したが、自然を神の衣裳と見たところに妙味がある。そしてその詩の中に於て我等の驚嘆する事は、彼が二千年前の人であり乍ら、天文の智識に豊富な事は、今日の人以上である事である。

天地創造の詩

陰雲水またその中に居る者の下に隠ふ。かれの御前には陰府も顯露なり。滅亡の抗を蔽ひ匿す所なし。彼は北の天を虚空に張り、地を物なき所に懸けたまふ。水を濃雲の中に包みたまふて、その下の雲裂けず、御寶座の面を隠して雲をその上に展べ、水の面に界を設けて光と暗とに限を立たまふ。かれ叱咤たまへば天の柱震ひかつ怖る。その權能をもて海を靜めその智慧をもてラハブを擊碎

き、その氣をもちて天を輝せ、その手をもて逃る蛇を衝きとほしたまふ。〔福よ是等はたゞその御工  
作の端なるのみ。我らが聞とこるの者は如何にも微細なる耳語ならずや。然もこの權能の雷轟に至  
りては誰かこれを曉らんや。〕(第二十六章五——一四節)

なんぢ昂宿の鍵索を結び得るや。參宿の繫繩を解うるや。なんぢ十二宮をその時にしたがひて引  
きだし得るや。また北斗とその子星を導き得るや。〔第三十八章三一——三二節〕

ヨブは之れほど自然に親しみが深かつたのだ。イザヤの自然の見方に比し、  
ヨブの見方は更に大きく且つ緻密であるついでにモウ一つ星の詩を引照しやう

地の基を我が置たりし時なんぢは何處にありしや、汝もし頓悟あらば言へ。なんぢ若知んには誰  
が度量を完めたりしや。誰か準繩を地の上に張たりしや。その基は何の上に奠れたりしや。その隅  
石は誰か置たりしや。かの時には晨星あひともに歌ひ、神の子等みな歡こびて呼はりぬ。〔第三十  
八章四——七節〕

之が冬ならばオレオン星座は東に出てゐやう。それが相共に歌つてゐるとい  
ふのだ。キラキラと。——それはクリスマスマスの裝飾のやうに銀色許りではない  
深い紫色——紫外線の色の星もまじつて——。

美しいフェイスが唄ひ了ると、又オリオンが一齊にソプラノのコーラスを始  
める。

何といふ晴々とした心持だらう。爽々しい風景だらう。こうした詩を読む時、  
私は拙ない私の散文詩の筆を折りたくなる。

創世紀の記述も規模雄大であるが、創世の直ぐ後から嘆きが来る。然るにヨ  
ブ記の天地創造は自然の喜びそのものであつて、嘆きは來ない。ヨブは創世紀  
の記録よりも、遙かに新しく且つ美しい。

私達もヨブに教へられて、モウ一度新しく天地を見直そう。

我等の眼が少し善くなると少し目が開く。善い目ほどバツチリと開いて居る  
悪い眼から世界を見る時、光も自然も美しくは見えない。美しいシャンデリヤ  
の光りさへ眼にしみて痛い。それと同じやうに、自然といふものが悦しく目に  
うつる爲めには、我等は健全な靈の眼を持たなければならない。ヨブの自然の